

上地のバーキづくり

—與志平朝蒲氏製作バーキ調査報告書—

2008年12月

沖縄市教育委員会

上地のバーキづくり

—與志平朝蒲氏製作バーキ調査報告書—

2008年12月

沖縄市教育委員会

はじめに

本報告書は、平成15年度に沖縄市立郷土博物館へ寄贈された與志平朝蒲氏製作のバーキを調査したものです。

本市上地は、かつてバーキづくりが盛んだった地域です。與志平氏は、その上地において、長年バーキづくりに携わってこられました。

その技術はたいへん素晴らしく、上地におけるバーキづくりの伝統が、製作されたバーキに表現されております。

本報告書が、地域や学校、各家庭において広く活用され、本市の文化財について考える一助となることを願ってやみません。

末尾になりましたが、調査にご協力いただいた多くの方々に対し、感謝を申し上げます。

2008（平成20）年12月19日

沖縄市教育委員会
教育長 真榮城玄昌

凡　　例

1. 本報告書は、平成 15 年度に沖縄市立郷土博物館へ寄贈された與志平朝蒲（よしひらちょうほう）氏のバーキ 28 点の調査報告書である。

2. 調査は平成 12 年度に基礎調査を、17 年度に本調査を行った。

3. 調査は、下記のメンバーで行った。

調　　査：木下義宣（沖縄市文化財調査審議会委員）

調　　査　助：宮城昭美（沖縄市立郷土博物館）

宮城利旭、辺土名初美、當真香、金城直子（前郷土博物館）

比嘉賀盛（市文化財調査審議会委員）

報告書作成：比嘉清和（郷土博物館）

協　　力：池原直樹、崎原恒新（市文化財調査審議会）

4. バーキの名称については、與志平氏への聞き取りによる。

5. 與志平氏製作バーキ資料には、バーキ以外のものも含まれているが、竹細工製品の総称としてバーキと呼ぶこととする。

6. 與志平氏製作バーキ資料において、蓋付きかご、手提げかご、茶碗かご、果物かご、つりかご、チリカゴ、ウミディールについては、與志平氏が本土の講師に習ったもので、上地では製作されていないものであるが、與志平氏の高い技術を表すものとして掲載した。また、かご（六つ目編み指導用のサンプル）は、與志平氏が講師として六つ目編みを指導する際に用いたものである。

目 次

はじめに

凡 例

第1章 上地におけるバーキづくり	1
沖縄県の主な有用竹・笹	3
上地アラバーキ	6
バーキとの出会い	7
上地副業組合の設立	8
職人の技	8
技術の伝承へむけての取り組み	9
第2章 與志平朝蒲氏製作バーキ資料	11
アラバーキ 12 / アラバーキ 14 / ミンバーキ 16 / ヌンジョーキ 18 / ユナバーキ 20 / ユナバーキ 22 / フタバーキ (身部) 24 / フタバーキ (蓋部) 26 / ミージョーキ 28 / ミージョーキ 30 / ミージョーキ 32 / ミージョーキ 34 / ユイの仲間 36 / ユイ 38 / サギジョーキ 40 / 蓋付きかご 42 / 手提げかご 44 / ムチウブサー 46 / 茶碗かご 48 / 茶碗かご 50 / かご (六つ目編み指導用のサンブル) 52 / 果物かご 54 / 果物かご 56 / ソーキ 58 / カジラーティール 60 / カジラーティール 62 / つりかご 64 / チリカゴ 66 / ウミディール 68	
第3章 バーキの作り方	71
アラバーキの作り方	72
ミージョーキの作り方	74
六つ目かごの編み方	82
ティールの作り方	87

第1章 上地におけるパークづくり

沖縄県の主な有用竹・筍

日本における代表的な竹はモウソウチク（孟宗竹）、マダケ（苦竹）、ハチク（淡竹）の温帯系の3種である。県内における竹科の植物は、11属40余種（種、変種、品種、栽培品種を含む）が知られている。その中で、食材、建材、生垣、庭園樹などに用いられている主なものは、下表のとおりである。

種類	属名	名称	方言名	主な用途	特徴
竹類 (竹の皮は若竹になると落ちる)	地下茎は長くて細い	マダケ（苦竹） <i>Phyllostachys bambusoides</i>	カラタキ（唐竹）、カラタケ（西表）、カラダイ（与論、西表）、カラデー、デー、マーダー（奄美）、カラデ（喜界）、マーダー（加計呂麻）	御用竹（公儀用）として王家のために用いた。砂糖樽のたが（帶）、雨傘の骨、笛、船具用、高級花籠類、物干竿、籠織用竿、トーカチ（斗搔）、竹フゾウ（煙草入）、筍	稈は高さ18~20m、径10cmに達する。桿皮は緑色。3~4年後に灰白黄色になる。節は2環状。筍は4~5月に出る。稈は弾力と韌性に富み耐久力が強く、竹材中もともと工芸的性質にすぐれる。沖縄では、旧美里村が生産地であったが、絶対量が少なく、県外から購入していたため、バーキ類には殆ど用いなかった。美しくて丈夫な竹。
		ホティチク（布袋竹） <i>Phyllostachys aurea</i>	クサンダキ、チンブクダキ、チンブーダキ（豹竿の意）、アハタキ、クサンダイ、チボタキ（西表）、グサンダキ（石垣）、チャグダキ（与那国）	釣竿、杖、格子、パイプ、花籠類、庭園用、鑑賞用、門松、枝は箸、根の分部は細工物に利用	中高木で高さ8~10m、径3~5cm、基部の節間はごく短い。琉球王朝時代に導入され、各地で群落を見るが多い。稈は強靭だが編物細工には適しない。
		モウソウチク（孟宗竹） <i>Phyllostachys heterocycla</i>	モーソー、モーソーデー（奄美）、ヤマトウデー（喜界）	筍は食用（中国の孟宗が病弱の母親のために寒中に筍を求めて故事から、その後モウソウチクと称する）	稈は高さ10~15m、径20cmに達する。節は単環状で、若い時は短毛がある。枝は稈の中部以上に節に2本ずつ互生する。筍は4月に出て食用にされる。葉は枝先に2~8個ずつつく。中國原産で、1736年に薩摩藩に献納したものが日本各地へ広がった。沖縄では生育は良くない。
		ケイチク（桂竹） =タイワンマダケ（台湾苦竹） <i>Phyllostachys makinoi</i>			稈は高さ10~18m、径5~9cm。戦後、台湾より導入され栽培されているが生育は良好。
	トウチク	トウチク（唐竹） <i>Sinobambusa tootsik</i>		鑑賞用。	稈は高さ13m、径5cm。筍は6月ごろ出る。葉は小枝に3~9枚つく。
	マチク	マチク（麻竹） <i>Dendrocalamus latifolius</i>			高さ10~20m、径15cm内外。稈に直角に枝を出す。戦前は本部町伊豆味の桃原農園ほかに栽培されていたが、戦後台湾より導入、広く普及されるようになつた。

		ホウライチク (蓬萊竹) <i>Bambusa glaucescens</i>	ンジャタキ (苦竹)、ンジャダキ、ニガダキ、シマダキ (島竹)、カーダキ、ウビダキ (桶の帯竹の意)、クーダキ (鳥籠を作る竹の意)、ゲッタキ、インガタキ、インザダキ、キンチク (金竹)、鹿児島付近)、チンチク (種子島)	皮に粘り気があり、籠作りに最適で、竹細工に多く用いられる。生垣や川の土砂止め、集落内の屋敷林として植栽。建築用	秤は高さ 3 ~ 4 m、径 2 ~ 3 cm。上方は多少湾曲し、節間は 20 ~ 50 cm、肉厚で中央の空間は小さく、若い時は秤面に逆向きの細毛がある。枝は節から大小多数出る。筍は夏から秋に出る。葉は小枝に 3 ~ 15 枚つく。インドシナ原産。九州、琉球で生垣に植栽したのが逸出し、野生化した所がある。和名の蓬萊は中国伝説で仙人が住む山と言われる神仙境の意で、この竹を賞賛して名付けられたとのこと。
	地下茎は短くて太い	リヨクチク (綠竹) <i>Bambusa oldhamii</i>	マータク、マッタク、マツトウク、マティーケ (与那国)		高さ 12 m 内外、径 10 cm 位。筍を食用とするため台湾より導入された。
	ホウライチク	ダイサンチク (泰山竹) <i>Bambusa vulgaris</i>	マータク、マタクー、マッタク、マツトウク、マティク、ウブダキ (西表、桶の帯の意)、タイワンダキ (与那国)	筍は食用、幹は竿や建築用材、箸立、運搬用棒、物干し竿、ウチカビの鉄型	高さ 5 ~ 15 m、径 3 ~ 15 cm、鮮緑色で光沢があり、1 節から多数の枝が出る。竹の皮の表面には褐毛が多い。肉質部が厚く、その向きの細工に利用したが、皮を利用する竹細工には向かない。琉球王朝時代より宅地の周囲などに栽培される。
		キンシチク (金糸竹) <i>Bambusa vulgaris var. striata</i>		鑑賞用。	1955(昭和 30) 年ごろ台湾から導入され、庭園や公園などの植え込み用として使用。叢立性の竹で、高さ 4 ~ 5 m、径 8 ~ 9 cm。ダイサンチクの変種で、秤に黄金色の線条がある。
		シチク (薊竹) <i>Bambusa stenostachya</i>			高さ 10 ~ 12 m、径 8 ~ 12 cm。秤はやや湾曲し、枝が直角に出る。各節に 1 ~ 3 個の太い刺がある。戦前に台湾から導入された。
籠類 (竹の皮はずつと残る)	メダケ	リュウキュウチク (琉球竹) <i>Pleioblastus linearis</i>	ヤンバルダキ (山原竹)、ヤンバラーダキ、クンデヤンダキ、チヌブダキ、ヤマダキ、ダキ、イヤーゴロ、クダグン、ササ、デー、デフェ、ニヤーゴロ、ヤギロ (奄美)	丸竹細工、チヌブ、チニブ (簾、垣根、ヒンブン)、竹編み障子、天井、屋根などの建築用、庭築、炭俵	秤は高さ 1 ~ 3 m、径 1 ~ 2 cm、節間は 15 ~ 16 cm。琉球列島固有。秤は強弱で建築補助材、楊物、農業資材として利用され、枝葉は屋根葺きに用いられ、70 ~ 80 年もつ。
		タイミンチク (大明竹) <i>Pleioblastus gramineus</i>	シマダキ、ダイミヨー、デーノダキ、デーモーダキ、フクダキ、クサタキ (与那国)、ウシダイ、シノール (西表)	竹床、物干竿、苗材	秤は高さ 1 ~ 3 m、径 1 ~ 2.5 cm。節間は長く 25 cm 内外。沖縄諸島の固有と考えられている。葉はやや薄く下垂する。庭園樹として植栽され、秤、枝葉とともに脆弱なため建築補助材等には殆ど利用されない。

ゴザダケザサ (御座岳笠) <i>Pleioblastus gozadakense</i>	ウムトウダキ、 タキヤーマ(石垣)、ヤマダイ(与那国)、ヤマンダ イ(西表)	竹床、物干竿、 苗材矢材(伝承)、 屋根材	桺は高さ1~4m、径0.5~2.5cm。 節間は20~23cmあり、枝は1~2.5mと長い。石垣・西表島に自生する。桺は強靭でリュウキュウチクに勝り、建築補助材、垣根材、農業用資材として利用される。枝葉は屋根葺き用に良い。
カンザンチク (寒山竹) <i>Pleioblastus hindsii</i>	デミヨー、ダ イミヨー(西表)、 ダイミヨーダキ、 コバマダケ(石垣)、ダイミヨー チク、クバマダ イ(与那国)	竹床(石垣周辺)、 兼(小浜島)、横 笛(小浜島)、竹 垣用	桺は高さ2~5m、径2~3cm。 節間は14~15cm。枝は節より3~5本ずつ鋭角に出る。葉は小枝の先に4~7枚ずつつく。中国南部原産。関東地方以西で栽培。沖縄では与那国島、小浜島に多い。

参考文献

- | | | |
|-----------------|----------|-------|
| 『沖縄大百科事典』 | 沖縄タイムス社 | 1983年 |
| 『沖縄語辞典』 | 大蔵省印刷局 | 1998年 |
| 『図鑑 琉球列島有用樹木誌』 | 沖縄出版 | 1989年 |
| 『日本の野生植物 木本Ⅱ』 | 平凡社 | 1999年 |
| 『琉球列島植物方言集』 | 新星図書出版 | 1979年 |
| 『農務帳を読む』 | 比嘉武吉 | 1997年 |
| 『日本農書全書34』 | 農山漁村文化協会 | 1983年 |
| 『佐敷町史 2 民俗』 | 佐敷町 | 1984年 |
| 『沖縄植物野外活用図鑑』 | 新星図書出版 | 1979年 |
| 『沖縄の民具』 | 慶友社 | 1973年 |
| 『沖縄の暮らしと民具』 | 慶友社 | 1982年 |
| 『沖縄県史 第23巻 民俗2』 | 沖縄県教育委員会 | 1973年 |

上地アラバーキ

與志平朝蒲氏（大正2年生）の製作によるバーキ28点が平成15年6月12日に沖縄市立郷土博物館へ寄贈された。これらのバーキは、1953年～1983年頃にかけて製作されたものであるが、戦前から上地で作り続けられたバーキづくりの技術が受け継がれている。ここでは、與志平氏への聞き取りを交えながら、戦前における上地のバーキの時代背景を紹介する。

沖縄本島において竹細工の村として知られていたのは、南部地区では南城市佐敷の小谷と新里、北部地区では宜野座村の祖慶、漢那、名護市伊差川、今帰仁村、中部地区では、旧美里村や越來村一帯であった。「スーキカンナー」という沖縄民謡に“越來間切ぬ上地どいやいぱしが荒バーキーや買ひそらに”と村から村へ品物を売り歩く行商人たちの活気あふれるやり取りを歌う曲がある。歌の節にも登場するように、上地はアラバーキが有名で、“イーチアラバーキー”と呼ばれていた。



「…上地は上地アラバーキーという名前がついたおかげで、潤いができたんじゃないかなと。だから全体的に言うて、上地の経済を何して（支えて）くれたのはこの竹細工なんだと。」

與志平朝蒲氏はそのように語る。與志平さんは戦前の上地で実際に竹細工に従事され、竹細工の講師もなさった方である。

上地ではもともと竹細工が盛んだったので、上地で作られたアラバーキは「上地アラバーキ」と呼ばれていた。この上地アラバーキが、上地の経済をささえた。

「このタマナ（キャベツのこと）バーキを作る場合にはですね、上地の部落内ならばもう、どうしても4、50名（の方が）作ったと思いますが。夜もですね、ひどい人は2時間ぐらいしか寝てなかつたんじゃないかと思います。もう、『上地え錢神降とーんどー（上地はお金の神様が降りてきている）』して評判だったからね。」

上地では昔から副業としてバーキを作っていた。

「…耕地面積の広いところは副業はあまりなかったと思いますがですね。上地は面積が小さいから、昔から副業は盛んだったと思います。」

農地の多い地域では農業だけで生活できるが、農地の少ない上地にとって副業である竹細工は大事な収入源であった。だが、以前はまだ「錢神降る」ほどの収入源とはならなかつたという。「錢神降る」状況になるのは、昭和5年に上地副業組合ができてからである。

その前に、與志平さんの子ども時代を振り返ってみることにする。

バーキとの出会い

與志平さんがバーキ作りをはじめたのは10才頃である。親戚の家に遊びに行ったときに見よう見まねで作りはじめた。

小学4年生の時に学校でバーキ作りをやったが、仕上げのところで自信がなかつたので、家に持ち帰って近所の方に教えてもらい、翌日学校で仕上げて提出した。するとそれが県に出品されて見事1位になった。その後本土へも出品され、3位になった。與志平さんは、小さいころからバーキづくりの才能を発揮していた。

「私はもう、今は人間になったと思っております。」

與志平さんが突然こう言ひだした。周囲はどつと笑いにつつまれる。

以前は何だったんですかとたずねる。

「あの時分はですね、小学校出る時分、また、10代の終わりまで、(中略) “それがは人間にはならない(立派な大人にはなれない)”と言われるぐらいやんちゃ者で、そしてこのバーキグワーチュクヤー(竹細工を作る人)して遊んで歩いて、農作業は全然やらないし…」

意外な答えが返ってきた。周囲からそう言われるほど、バーキ作りはまだ理解を得られていなかつた。周囲の人はこう思っていた。「與志平さんが農作業をやらないのは体のどこかが悪く健康体でないからだ、陰で竹細工をして遊んでいるのはそのせいだ」と。しかし、與志平さんが農作業をやらなかつたのは、決して体のど



こかが悪かったからではない。家庭の境遇のせいだった。與志平さんの家庭は、広い農地を持っていなかったため、子どもの頃からバーキ作りをしていたのである。

竹細工がどんなにうまくても評価されない。その時、與志平さんは何を思つただろうか…。

だが、そんなバーキグーチュクヤーが、いずれ上地の役に立つことになる。

上地副業組合の設立

昭和5年、上地副業組合が設立された。

当時の沖縄は、冬キャベツの産地として全国一を誇り、国内はもとより朝鮮や中国東北部にも出荷していた。そのキャベツの出荷用として、竹かご等の需要が急速にのびたのである。副業組合では竹製品の統一が行われ、品質改善や技術の刷新を追求した。

副業組合では、県から招かれた本土の講師による講習が行われた。與志平さんは17歳の時に初めて講習を受け、いろいろな技術を学んだ。

竹細工の生産は、組合が千個単位で業者と契約し、各人へ割り当てるという方法で行った。一人あたりの割り当てはバーキ25個・ミーバーラー4個であった。割り当てをこなすと、奨励金がもらえたという。

竹細工の需要は増加の一途をたどり、材料である竹は、上地では需要のわずか2割程度しか調達できず、倉敷や御殿敷、遠くは金武あたりまで調達に出かけた。

即現金収入となる竹細工は魅力的で、各家庭では夜になっても明かりを灯しながら作り続け、子どもたちも手伝ったという。

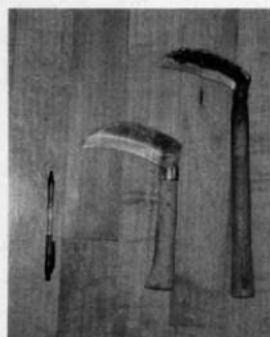
組合の設立によって上地アラバーキは県内で有名になり、與志平さんの技術もまた、活きる場所を得た。

職人の技

竹細工の製作はアチイラナ（厚鎌）のみで行った。これは沖縄の竹細工の特徴である。本土の工芸品の製作には、ナタを使用したこともあった。

與志平さんはこのアチイラナ1本を上手に使いこなす。例えば、バーキ作りの製作工程で一番難しいとされる竹ヒゴ作りでは、普通の人がヒゴを3本しか作れないところを、與志平さんは4本作ってしまう。

製作されたバーキは、どれも同じ大きさであり、均整がとれてい



竹採りに使った厚ガマ（右）と竹細工に使ったアチイラナ（左）

て美しい。

バーキの大きさをどうやって決めているのか聞くと「手が覚えている」と言って、いつも同じ大きさのものが作れるという自信をのぞかせた。

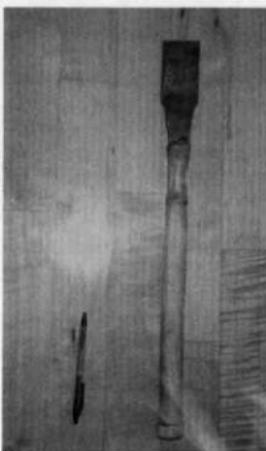
しかし技術があるだけでは職人とはいえない。これだけ大量の需要があると、品質を落としてでも数多く作らなければならないこともある。

「だから、私の物はね、みんなで“あれは上手だよ”という時期もあればね、
“ありが物やならんしが、売いぐるさぬ（あれのはだめだ、売りにくいから）”
といってね。」

バーキが大量に必要な時期には半分の材料で一つのバーキを作。そのため、手に持つとやわく、非常に軽い。逆に買い手が少なくなってくるとしっかりした頑丈なものを作って、再び自分の技術をアピールするのである。

與志平さんは、これまで40種類もの竹細工を製作してきたが、中にはちょっと変わった物もある。戦時中に作った竹飛行機である。

竹飛行機は、米軍機が本物の飛行機と見誤って爆弾投下するのをねらったものである。鹿児島から竹細工の職人たちが来て、竹飛行機の図面を見たが、職人たちは作れないと言った。ちょうどその時、與志平さんは飛行場の測量を手伝っていた。マイクで呼びだされ、竹飛行機の製作を命じられた。與志平さんは、竹細工をしていた者を集め、竹飛行機を完成させた。米軍はねらい通り爆弾を落としてきたが、爆風でふわっと浮いた機体の底が竹だったのを見て、その後爆弾を落とさなくなった。



竹を根元から伐るのに使ったノミ

技術の伝承へむけての取り組み

戦後、與志平さんは生業としてのバーキづくりをやめた。講師として教えることはたまにあったが、自分で作って売ることはしなかった。役所から講習を依頼された時も「教えることはするが、あまり人に前に名前を出さないでくれ」と頼んだ。

「私が竹細工やったのはですね、ただ暇だからやっただけであってですね。貧乏であって何もすることができないので、竹と遊んでいたら、それがお金になつただけの話であります。」

與志平さんは竹細工で稼いだお金を子どもの学費にあてた。貧乏で学校へ行けなかった自分の境遇を思い出し、子どもたちは学校に行かせようと決意した。竹細工で生活していくのは自分の世代で終わりにしようと思い、子どもたちには竹細工をさせなかつた。子どもたちは立派に育ち、学校的先生などになつた。

しかし、一方でさみしい気持ちもあつた。上地アラバーキが自分の代でなくなる。先輩から受け継いだ伝統が失われてしまう。自分の持つてゐる技術をなんとかして後世に伝えないと與志平さんは思うようになつた。

その思いを、上地郷友会のみなさんがうけとめた。現在、上地アラバーキの技術の継承へむけた取組みがはじまつてゐる。「月に一度でいいから、みんなで集まって竹細工の勉強をしよう。次の世代に竹細工を伝えていく努力をしよう」少しづつだが、みんな子どもの頃バーキ作りをした経験を思い出しつつある。

(本文は、平成12年12月19日に行われた聞き取り調査を元に構成したものである。)

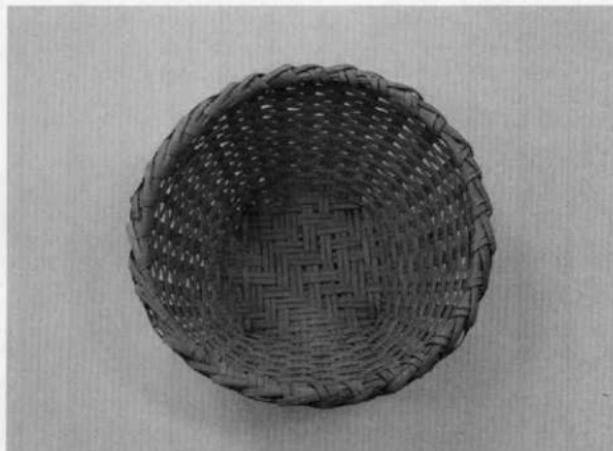
第2章 與志平朝蒲氏製作バーキ資料

名称	アラバーキ	取扱品番号	2003-1-0005
----	-------	-------	-------------

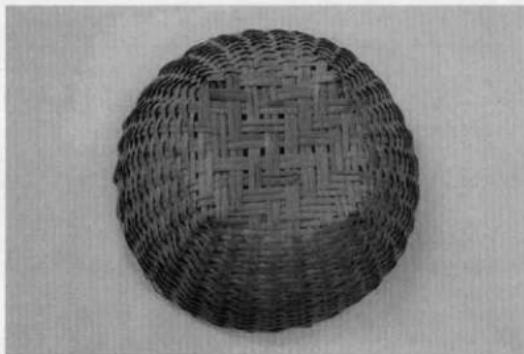


全体俯瞰

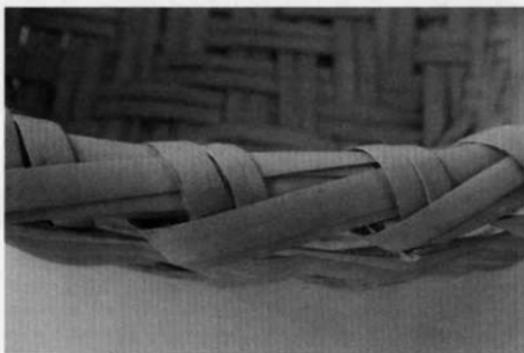
製作年月日	キャベツ(タマナー)の出荷に使った。	
用 途		
材 料 素 材	ホウライチク(シジャダキ) 縄ひご(カシ) 使用本数:32本(8列×2本×2)	
材 料 尺 法 mm	幅:9~10 厚さ:0.8 長さ:1,200 巻ひご(ヌチ) 本数:適量 幅:9~11 厚さ:0.8 長さ:竹1本分	
底の編み方	網代編み 上の縫の部分に少し隙間を空けて作っておいた。	
伝 承 な ど	出荷の際には、キャベツを出来るだけたくさん詰めた後、この隙間に紐を通して締め包した。	
略 図	寸法(裏側・高さ・耳・蓋の有無など)	単位:mm
備 考	編み方は72ページ参照	



上面



底面

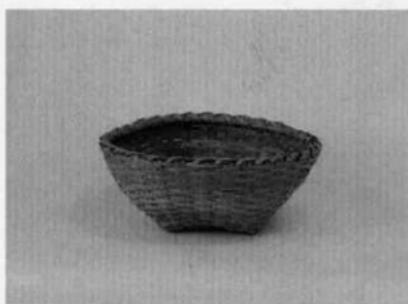


縁外側



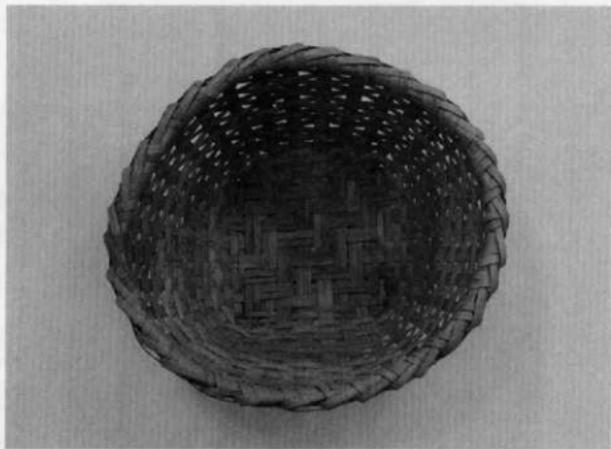
縁内側

名称	アラバーキ	収蔵品番号	2003-1-0006
----	-------	-------	-------------

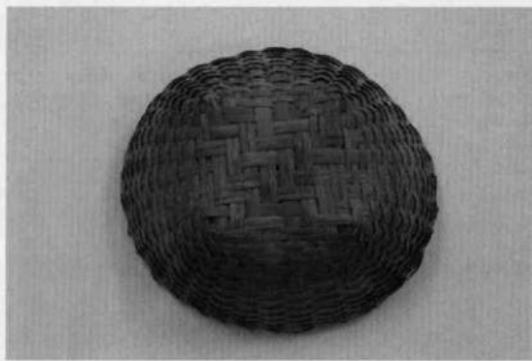


全体俯瞰

製作年月日	土木工事の際に土砂の運搬に用いた。	
用 途		
材 料 素 材	ホウライチク(ンジャダキ) 縄ひご(カシ)使用本数:32本(8列×2本×2)	
材 料 尺 法 mm	幅:8~9 厚さ:0.8 長さ:110 卷ひご(又チ)本数:適量 幅:8~9 厚さ:0.8 長さ:竹1本分	
底の編み方	網代編み	
伝 承 な ど		
略 図	寸法(直径・高さ・耳・脚の有無など)	単位:mm
備 考	編み方は72ページ参照	



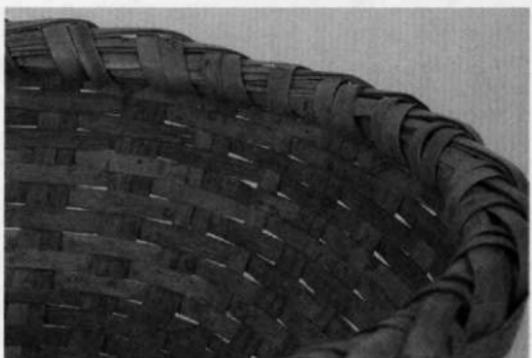
上面



底面



縁外側



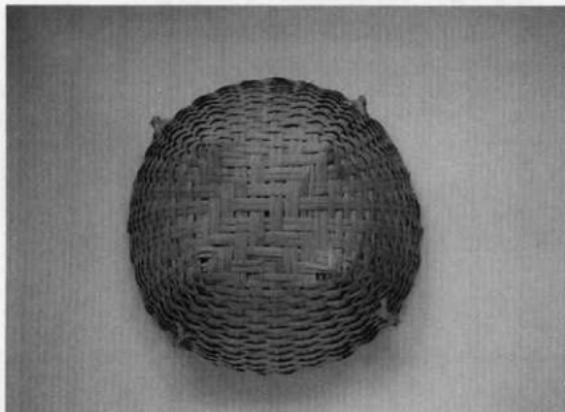
縁内側

名称	ミニバーキ	収蔵品番号	2003-1-0007
----	-------	-------	-------------



全体俯瞰

製作年月日		
用 途	掘った芋や、堆肥を入れ運搬するのに使用した。	
材 料 素 材	ホウライチク(シジャダキ) 綾ひご(カシ) 使用本数:32本(8列×2本×2) 幅:7~10 厚さ:0.5 長さ:1,000	
材 料 尺 法 mm	巻ひご(ヌチ) 本数:適量 幅:8~10 厚さ:0.6~0.8 長さ:竹1本分	
底の編み方	網代編み 4個の耳をつけそこにロープを通し、天秤棒の両端に對で吊して使用した。	
伝 承 な ど		
略 図	寸法(直径・高さ・耳・重の有無など)	単位:mm
備 考	編み方は72ページ参照	



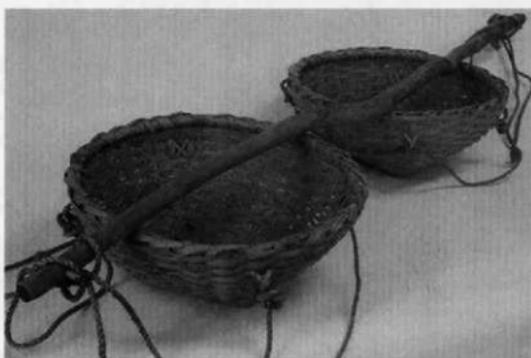
底面



縁外側

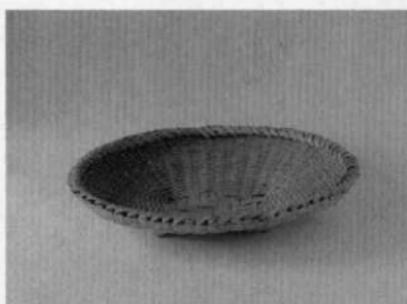


縁内側



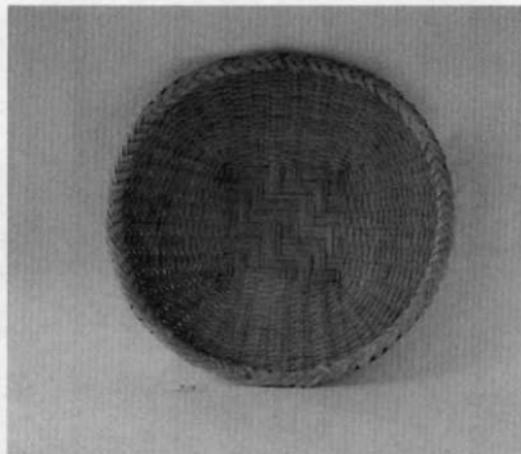
使用状況

名称	ンムジョーキ	収蔵品番号	2003-1-0008
----	--------	-------	-------------

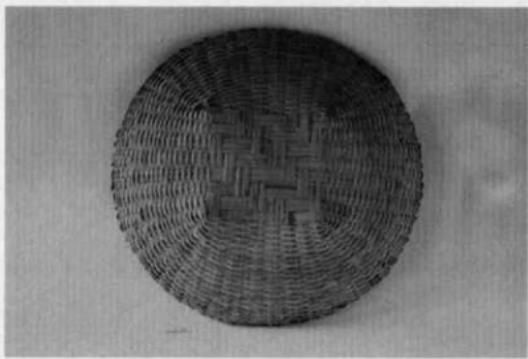


全体俯瞰

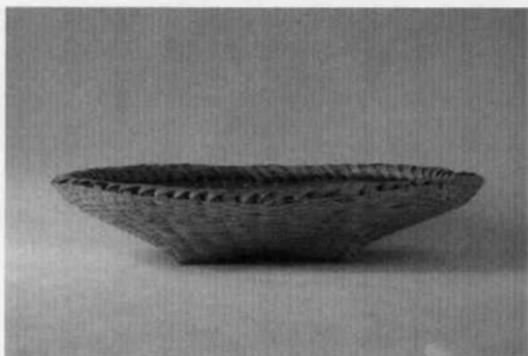
製作年月日	1978～1979年頃		
用 途	主食である煮た芋を入れて食卓上に置いて使った。		
材 料 素 材	ホウライチク(ンジャダキ)		
縦ひご(カシ)	使用本数: 32本(8列×2本×2) 幅: 7.5～9 厚さ: 0.5 長さ: 900		
材 料 尺 法 mm	使用本数は途中から増える。 巻ひご(ヌチ) 本数: 適量 幅: 3.5～4 厚さ: 0.5 長さ: 竹1本分		
底の編み方	網代編み		
伝 承 な ど	家族の歴史によってンムジョーキの大きさが変わった。 芋の皮は、豚のえさにもなった。どの家庭にもあった。		
略 図	尺法: mm 		
備 考	編み方は72ページ参照		



上面



底面



縁外側



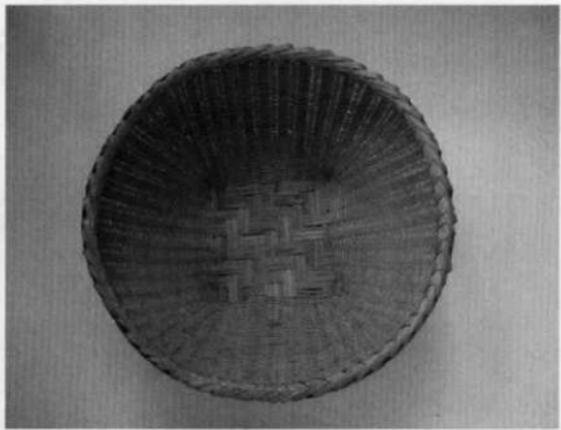
縁内側

名称	ユナバーキ	収蔵品番号	2003-1-0009
----	-------	-------	-------------

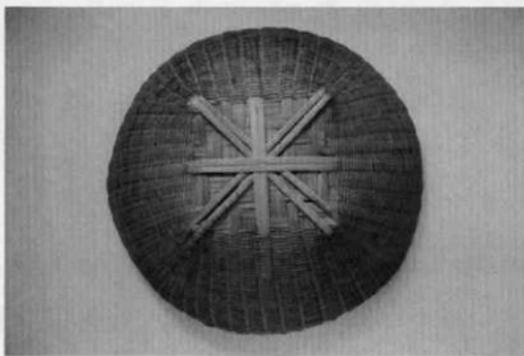


全体俯瞰

製作年月日	1945年頃		
用 途	トーカチ(米寿)の祝いで、米を八升八合入れた。		
材 料 素 材	ホウライチク(ンジャダキ) 縄ひご(カン) 使用本数: 36本(9列×2本×2) 幅: 7~8 厚さ: 0.8 長さ: 1,000		
材 料 尺 法 mm	卷ひご(ヌチ) 本数: 適量 幅: 2~3 厚さ: 0.8 長さ: 竹1本分		
底の編み方	網代編み (補強材有り)		
伝 承 な ど	マガイ(縄周り)の下まで米を入れると八升八合になる。そのため、マガイを作る前に砂を入れ、大きさを確認した。		
略 図	単位:mm 		
備 考	編み方は72ページ参照		



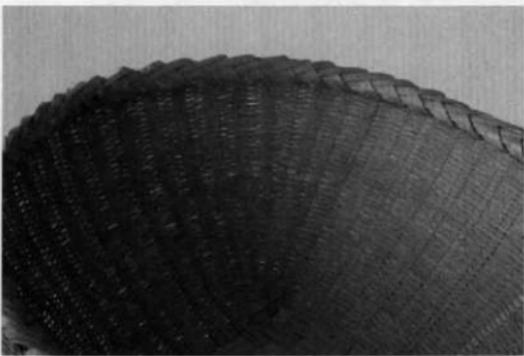
上 面



底面



縁外側



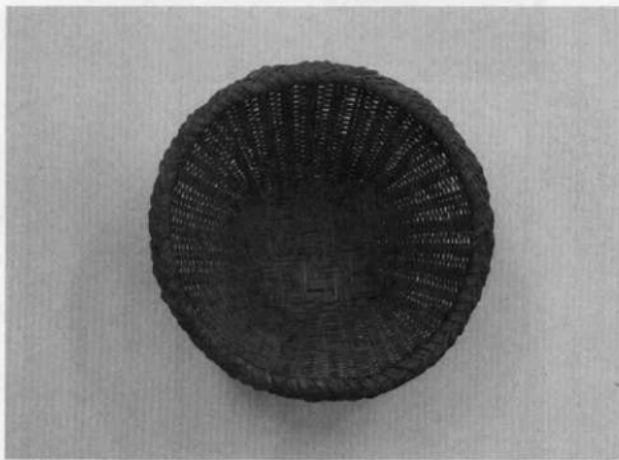
縁内側

名称	ユナバーキ	收蔵品番号	2003-1-0010
----	-------	-------	-------------

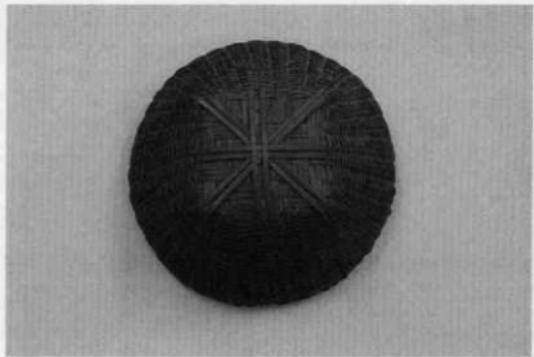


全体俯瞰

用 途	米などを量る時に使用した。		
材 料 素 材	ホウライイチク(ンジャダキ) 縄ひご(カシ) 使用本数: 32本(8列×2本×2)		
材 料 尺 法 mm	幅: 6~8 厚さ: 0.3 長さ: 950 巻ひご(ヌチ) 本数: 适量 幅: 4 厚さ: 0.3 長さ: 竹1本分		
底の編み方	網代編み (補強材有り)		
伝 承 な ど			
略 図	寸法:mm 単位:mm	345	170 150
備 考	底の補強材: 2本×4方掛け 幅: 0.6~0.7 長さ: 300 厚さ: 0.5 編み方は72ページ参照		



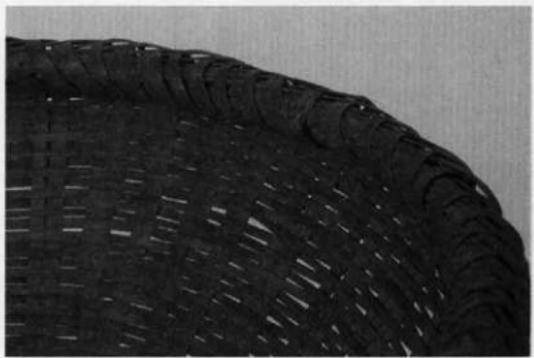
上 面



底面



縁外側



縁内側

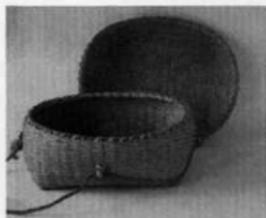
名称

フタバーキ(身部)

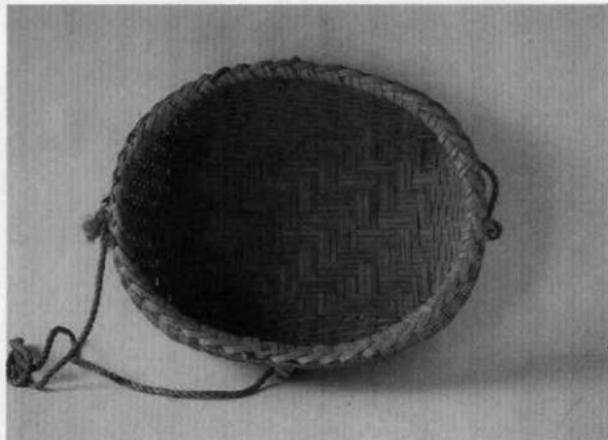
收藏品番号 2003-1-0011



全体俯瞰



用 途	物を入れて蓋をし、紐を4力所の耳に通して縛った。蓋なしで入れ物として使用する事もある。	
材 料 素 材	ホウライチク(ンジャダキ) 縄ひご(カシ) 使用本数:50本	
材 料 尺 法 mm	幅:5.5~7.0 厚さ:0.5 長さ:1,050×15列×2本 長さ:900×10列×2本	
巻ひご(ヌチ) 本数:適量	幅:5.5~7.0 厚さ:0.5 長さ:竹1本分	
底の編み方	網代編み 耳が付いている。 底のカシは1列3本で、立ち上がり部分から2本。	
伝 承 な ど		
略 図	寸法・底径・耳・蓋の寸法等 (たてな)	<p>単位:mm</p> <p>側面</p> <p>平面</p>
備 考	編み方は72ページ参照	



上面



底面



縁外側



縁内側

名称

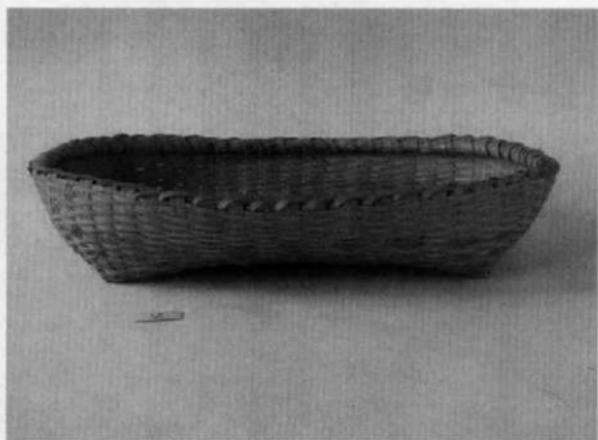
フタバーキ(蓋部)

收藏品番号 2003-1-0011

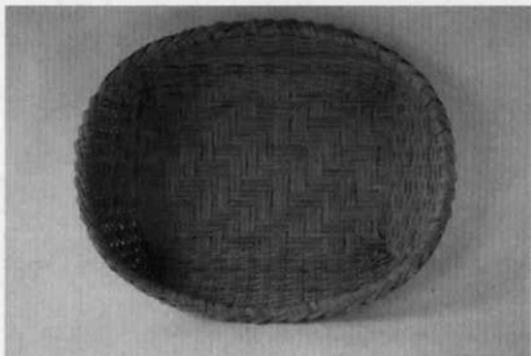


全体俯瞰

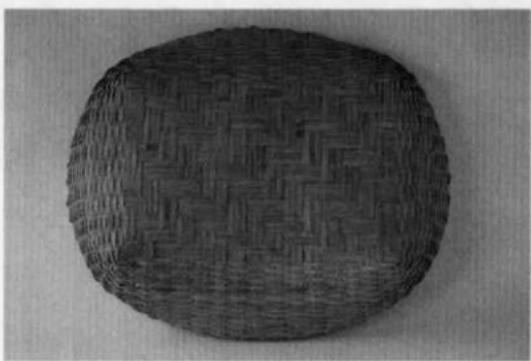
用 途	物を入れて蓋をし、紐を4カ所の耳に通して綴った。蓋のみを入れ物として使用する事もある。
材 料 素 材	ホウライテク(ンジャダキ) 縄ひご(カシ) 使用本数:50本
材 料 尺 法 mm	幅:5.5~7.0 厚さ:0.5 長さ:700×15列×2本 長さ:850×10列×2本
	巻ひご(ヌチ) 本数:適量 幅:5.5~7.0 厚さ:0.5 長さ:竹1本分
底の編み方	網代編み
伝 承 な ど	
略 図	<p>寸法ハ蓋の幅・高さ・耳・紐の有無等を示す</p> <p>単位:mm</p> <p>側面</p> <p>平面</p>
備 考	編み方は72ページ参照



蓋のみで使用する場合



蓋底面



蓋上面

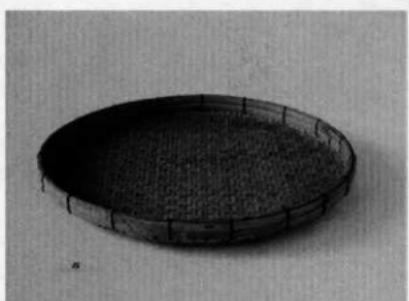


縁外側

名称

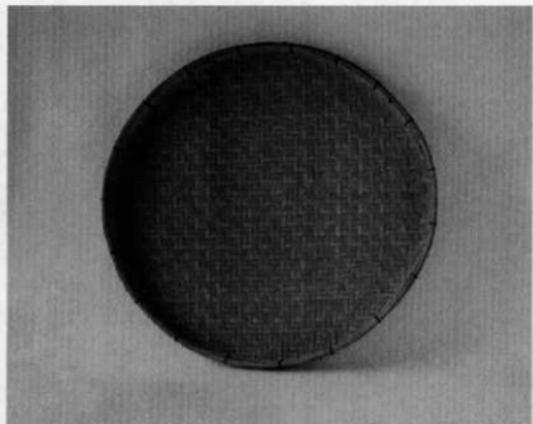
ミージョーキ

収蔵品番号 2003-1-0012

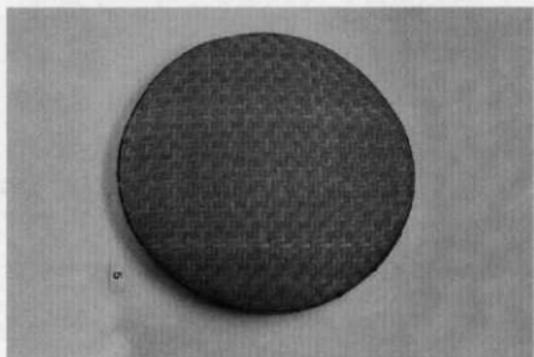


全体俯瞰

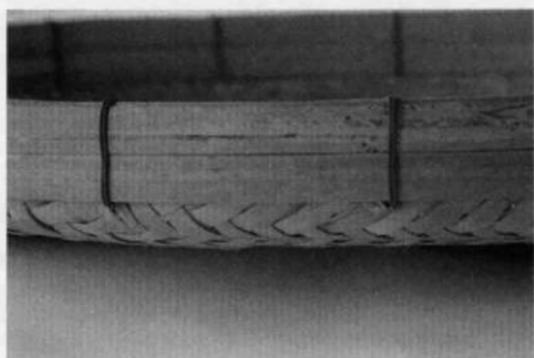
用 途	穀物の実と殻をふるい分けたり、干したりする時に使用した。
材 料 素 材	ホウライチク(ンジャダキ)、銅線 縄ひご(カシ) 使用本数: 64本×2方向 幅: 8.0 厚さ: 0.3 長さ: 400~700
材 料 尺 法 mm	縄竹 本数: 4本(外側、内側各2本) 幅: 15 厚さ: 3 長さ: 1,800
底の編み方	2本飛び網代編み 40年前に作った。 縄竹は、7~8cm間隔で銅線で結ってある。
伝 承 な ど	
略 図	寸法(へ 長さ・高さ・耳・脚の有無など) 単位:mm
備 考	編み方は74ページ参照



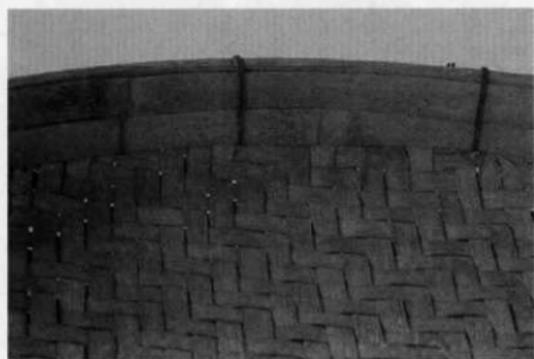
上面



底面

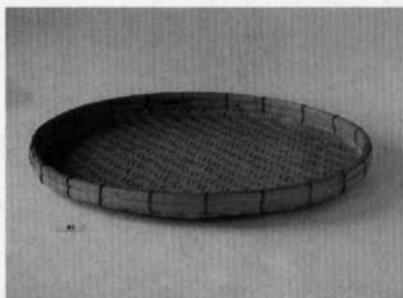


縁外側

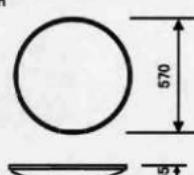


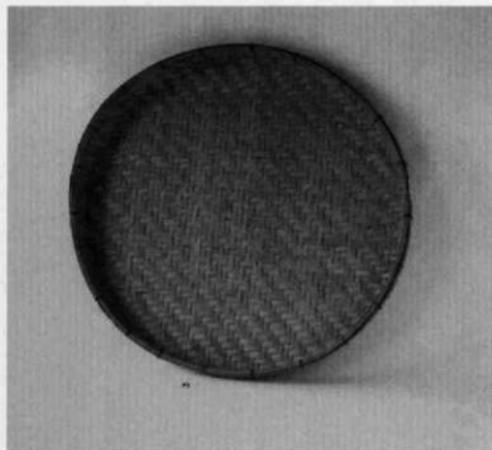
縁内側

名称	ミージョーキ
収蔵品番号	2003-1-0013

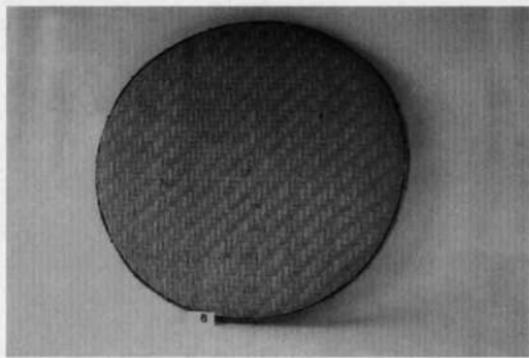


全体俯瞰

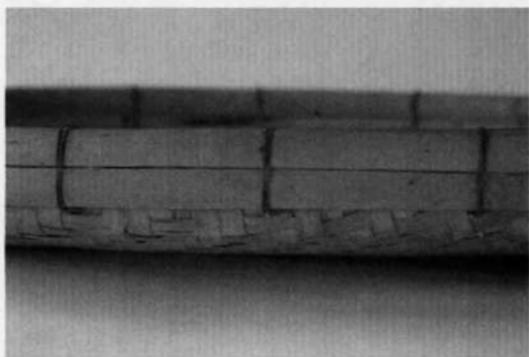
用 途	大豆、麦、穀物をより分けるもの。 ユイでより分けた物をさらに細かく分ける時などに使った。(P38参照)
材 料 素 材	ホウライチク(シヤダギ)、針金 縫ひご(カシ) 使用本数:63本×2方向
材 料 尺 法 mm	幅:8.4~10 厚さ:0.3 長さ:400~700 外皮:たて方向、ワタ:よこ方向に使用 縫竹 本数:4本(外側、内側各2本) 幅:15 厚さ:3 長さ:1,900
底の編み方	2本飛び網代編み
伝 承 な ど	石川先生(新潟出身の方で県から技術指導者として派遣)から教わった。縫竹を縛るのに現在は針金や銅線を使用しているが、以前はヤマカズラで縛った。
略 図	寸法(直径・高さ・耳・巻の有無など) 单位:mm 
備 考	編み方は74ページ参照



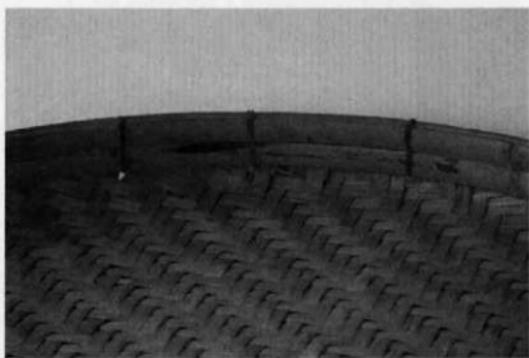
上面



底面

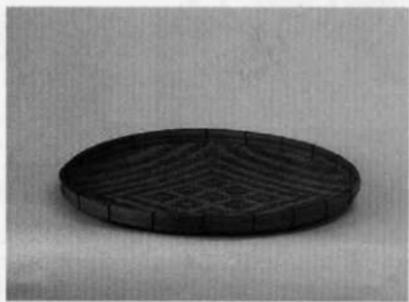


縁外側

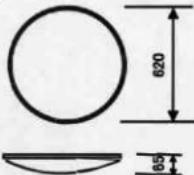


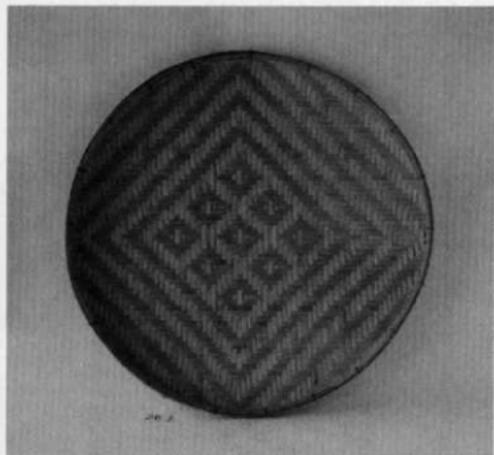
縁内側

名称	ミージョーキ	収集品番号	2003-1-0014
----	--------	-------	-------------

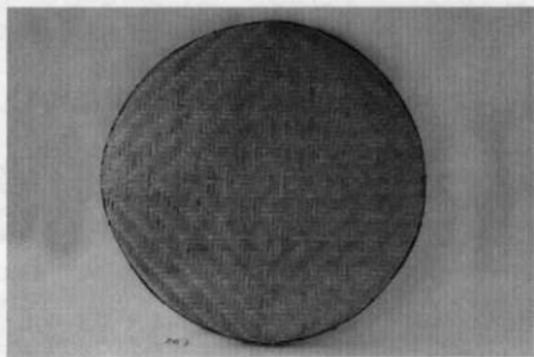


全体俯瞰

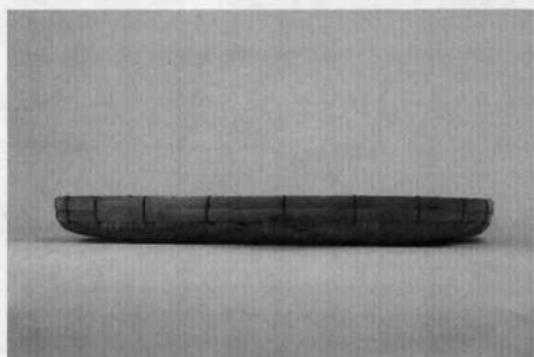
用 途	穀物をふるい飛ばし選別する用具。	
材 料 素 材	ホウライチク(シジャダキ)、銅線 縫ひご(カシ) 使用本数: 71本×2方向	
材 料 尺 法 mm	幅: 8.4~10 厚さ: 0.3 長さ: 350~830 外皮とワタ混ぜて使用し、模様を作った。 縫竹 本数: 4本(外側、内側各2本) 幅: 15 厚さ: 3 長さ: 2,050 幅: 25 厚さ: 3 長さ: 2,050×1本	
底の編み方	中央部: 花ますあじろ編み(模様: 3×3個) 外側部: 連続ますあじろ編み	
伝 承 な ど	縫竹は、9~10cm間隔で銅線で縛ってある。	
略 図	寸法(縫縫・高さ・耳・縫の有無など)	単位:mm 
備 考	編み方は74ページ参照	



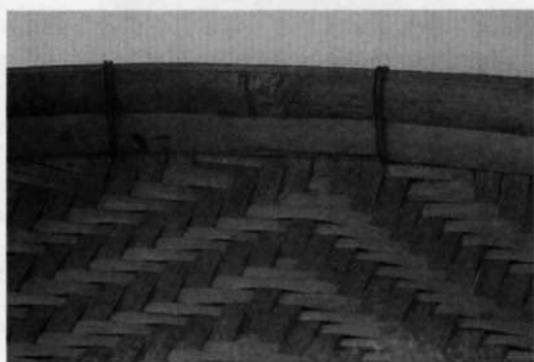
上面



底面

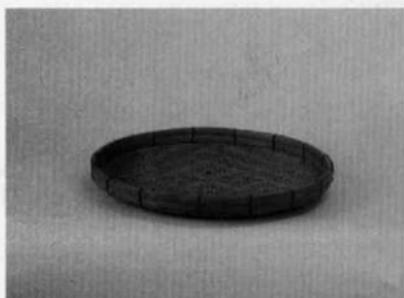


侧面

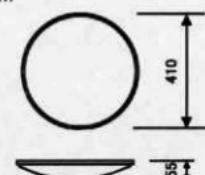


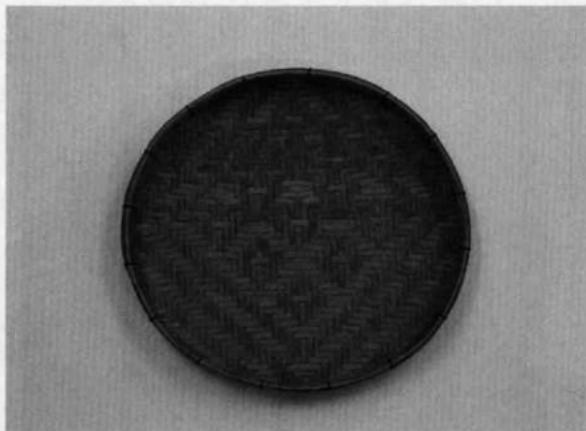
縫内側

名称	ミージョーキ	収蔵品番号	2003-1-0015
----	--------	-------	-------------

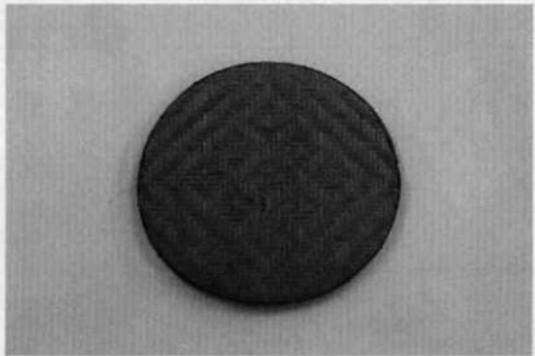


全体俯瞰

用 途	穀物をふるい飛ばし選別する用具。	
材 料 素 材	ホウライチク(ンジャダキ)、銅線 縄ひご(カシ) 使用本数:47本×2方向	
材 料 尺 法 mm	幅:6.6~0.8 厚さ:0.03 長さ:300~550 外皮とワタ混ぜて使用し、模様を作った。 縄竹 幅:13 厚さ:4 長さ:1,400×4本 幅:40 厚さ:3 長さ:1,400×1本	
底の編み方	中央部:花ますあじろ編み(模様:3×3個) 外側部:連續ますあじろ編み 縄竹は、7~8cm間隔で銅線で縛ってある。	
伝 承 な ど		
略 図	寸法(外直径・高さ・耳・底の有無など) 単位:mm 	
備 考	編み方は74ページ参照	



上面



底面



縁外側

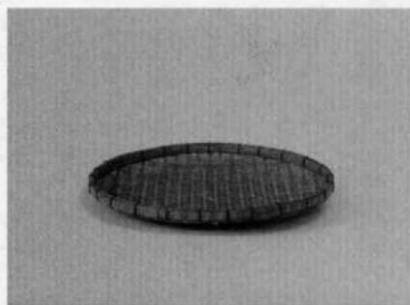


縁内側

名称

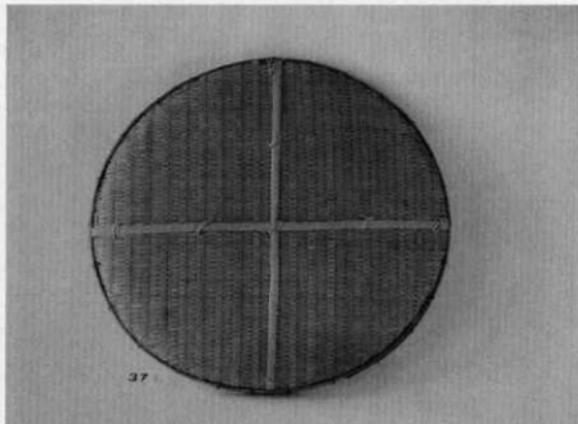
ユイの仲間

収蔵品番号 2003-1-0016

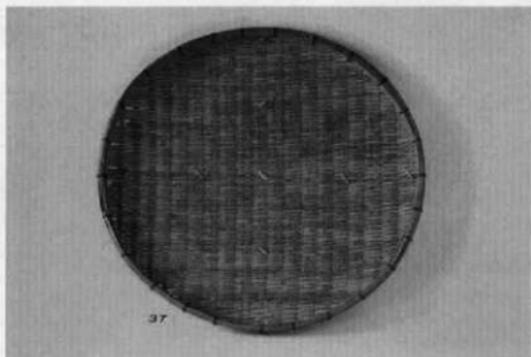


全体俯瞰

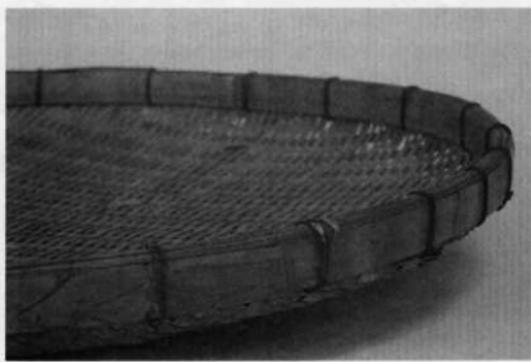
用 途	穀物のふるい分けに使用
材 料 素 材	ホウライチク(ンジャダキ)、銅線 縫ひご(カシ) ワタを使用。本数:20本
材 料 尺 法 mm	幅:8~10 厚さ:0.3 長さ:300~550 巻ひご(ヌチ) 外皮を使用 幅2.5~3 厚さ:0.3 長さ:竹1本分 緑竹 幅:20×2本 長さ:1,600 押さえ竹(ささら割) 幅:5
底の編み方	ざる目編み
伝 承 な ど	齊藤平さん自身で考案し、製作したので呼び名はわからない。 緑竹は、4.5~6.5cm間隔で銅線で縛ってある。
略 図	寸法(・重量・高さ・厚さ等の有無など) 单位:mm
備 考	



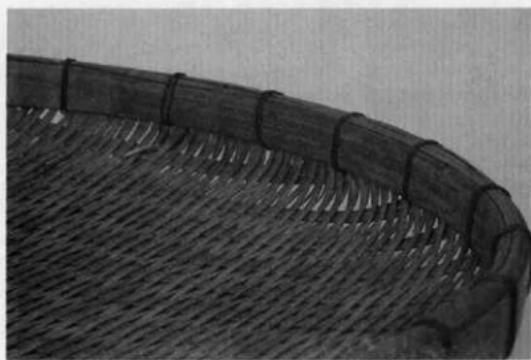
底面



上面

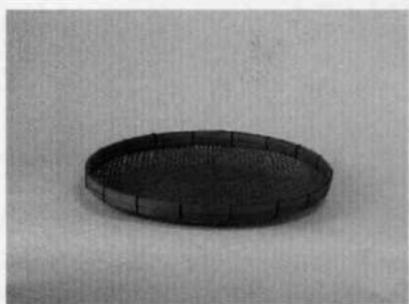


縁外側



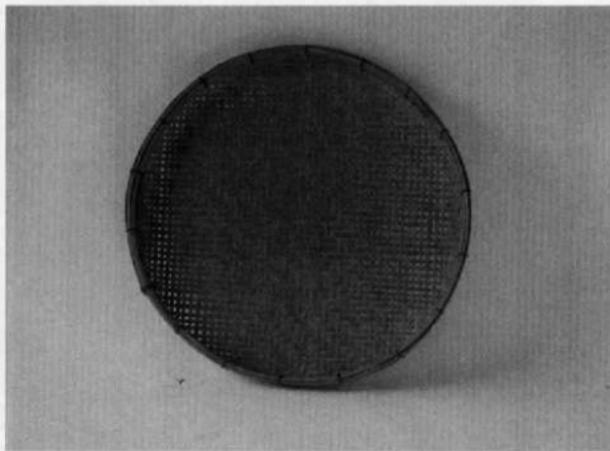
縁内側

名称	ユイ	収蔵品番号	2003-1-0017
----	----	-------	-------------

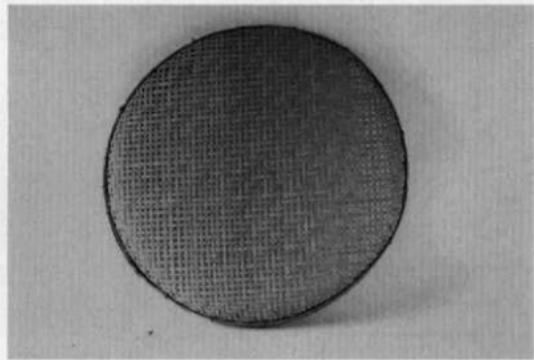


全体俯瞰

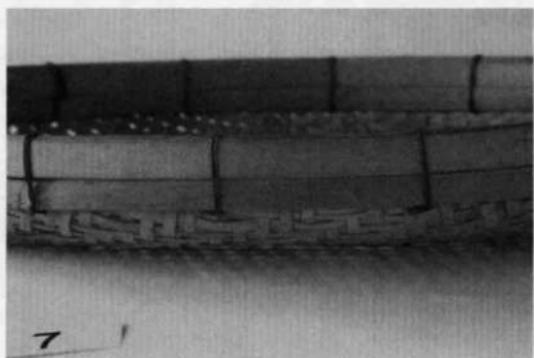
用 途	穀物をふるって小さいクズや土などを下に落として選別する。ユイでの作業の後に、ミージョーキを使う。
材 料 素 材	ホウライチク(シジャダキ)、銅線 縫ひご(カシ) 外皮を裏向きに使用
材 料 尺 法 mm	幅:5~6 厚さ:0.3 長さ:300~600 28列×2×2+2=114本 縫竹 幅:15×2本, 11×2本 長さ:1,600 押さえ竹 厚さ:4
底の編み方	二つ目とびあじろ編み 隙間3.3mm~5mm
伝 承 な ど	與志平さん自身で考案し、製作したので呼び名はわからない。 縫竹は、4.5~8.5cm間隔で銅線で縛ってある。
略 図	寸法・重量・高さ・耳・蓋の有無など
備 考	編み方は74ページ参照



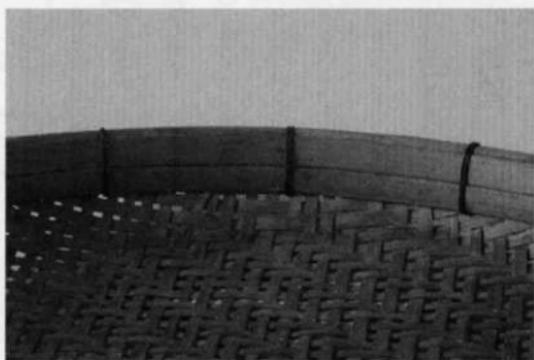
上面



底面



縁外側



縁内側

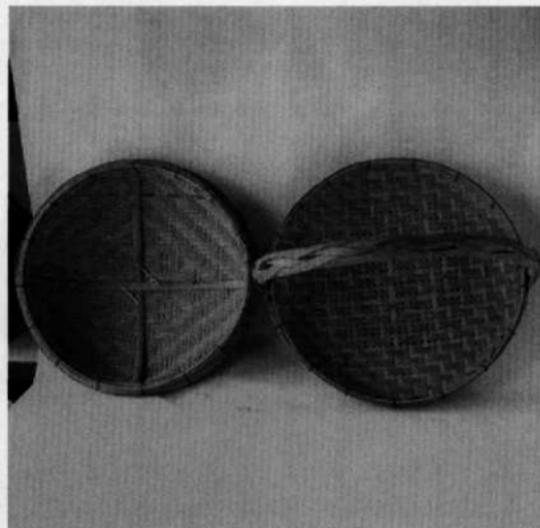
名称 サギジョーキ

收藏品番号 2003-1-0018

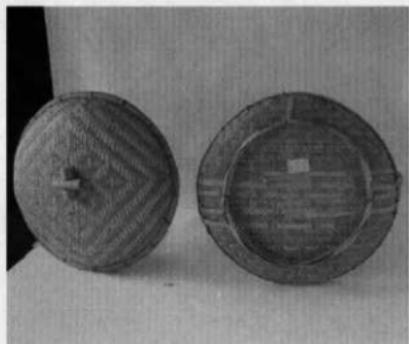


全体俯瞰

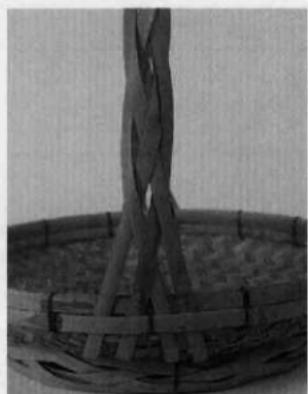
製作年月日	1973年頃
用 途	食べ物を入れて軒先などの涼しい場所に提げておいた。
材 料 素 材	ホウライチク(シジャダキ) 縄ひご(カシ)
	幅:7~8 厚さ:0.8 長さ:300~600
材 料 尺 法 mm	縄竹 幅:15 長さ:1500 厚さ:2~3
調物が無いので 寸法取り出来ない	
底の編み方	花ますあじろ編み
伝 承 な ど	編み目模様を石川先生から教わった。手提げの4本編みが難しい。蓋を丁度良い大きさに作るのが難しい。
略 図	寸法(直径・高さ・耳・縄の寸法など) 単位:mm
備 考	編み方は74ページ参照



蓋を開けた内側



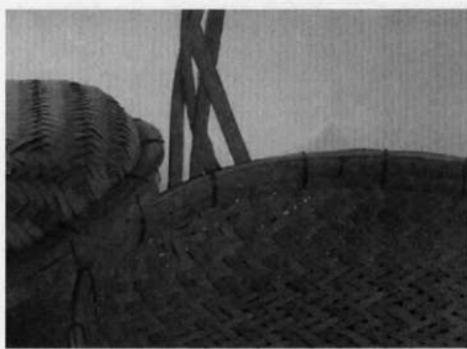
蓋を開けた外側



取手の編み方



縁外側



縁内側

名称	蓋付きかご	収蔵品番号	2003-1-0019
----	-------	-------	-------------

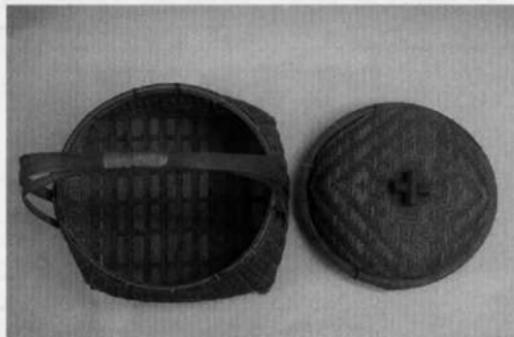


全体俯瞰

製作年月日	1953年頃 食べ物の保存容器として使用していた。	
用 途		
材 料 素 材	ホウライチク(ンジャダキ) 縄ひご(カシ)・外皮とワタを使用	
材 料 尺 法 mm	蓋部 縄ひご(カシ)・外皮 幅: 5~5.7 厚さ: 0.3 長さ: 200~440 29列 × 2 + 1本 = 59本	下部 縄ひご(カシ)・外皮 幅: 7.5~8.5 長さ: 650 寸指し幅: 15~16 長さ: 250 巻ひご(ヌチ) 幅: 22~25
底の編み方	花ますあじろ編み(外皮が表側になるように)	
伝 承 な ど	17歳くらいの時、石川先生に教わった。昭和5~6年頃から上地でも作られるようになった。ヌチは二本で編む。 1953年5月26日ベルリ捷音来境100周年記念展覧会 一等真愛賞作品(賞状あり)	
略 図	尺 高さ・耳・縫合部 (たむねり)	
備 考		



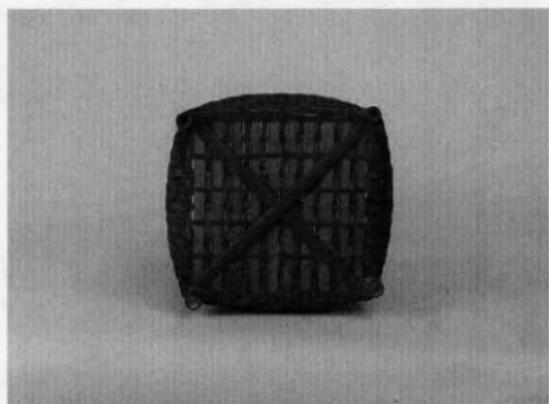
蓋を開けた状態



上面



侧面



底面

名称 手提げかご

収蔵品番号 2003-1-0020

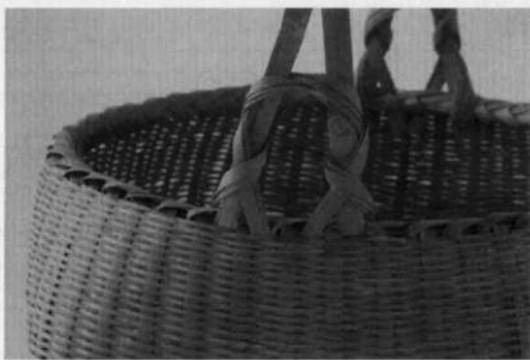


全体俯瞰

製作年月日	1953年頃 食べ物を入れたり、花器として使用した。	
用 途		
材 料 素 材	ホウライチク(ンジャダキ) 縄ひご(カシ) 使用本数: 11本+15本 幅: 8~8.7 厚さ: 0.3 長さ: 680	
材 料 尺 法 mm	巻ひご(ヌチ) 本数: 適量 幅: 2 厚さ: 0.3 長さ: 竹1本分 差し込み竹(ワタ) 幅: 13~16 長さ: 320 10本 その他 取手材 足材有り	
底の編み方	筏編み 石川先生から教わった。	
伝 承 な ど		
略 図	単位:mm 	
備 考	サイズ(直径・高さ・耳・耳の有無など)	



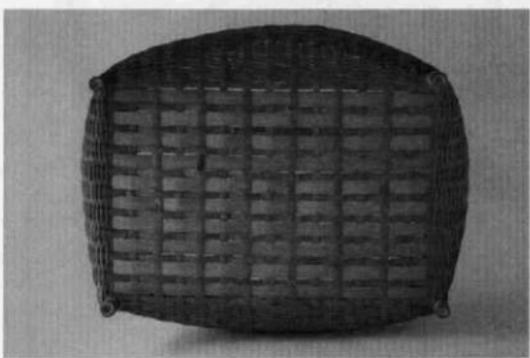
手提げ部分



縁外側



縁内側

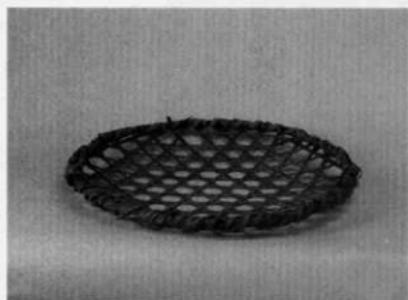


底面

名称

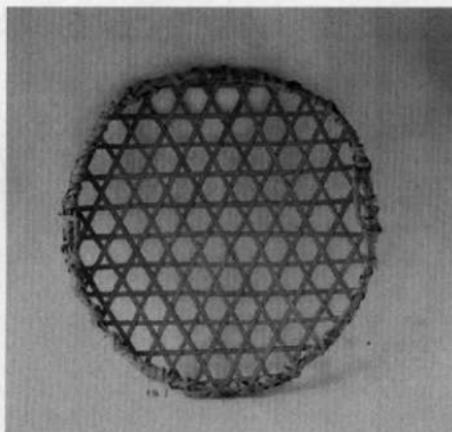
ムチウブサー

収録品番号 2003-1-0021

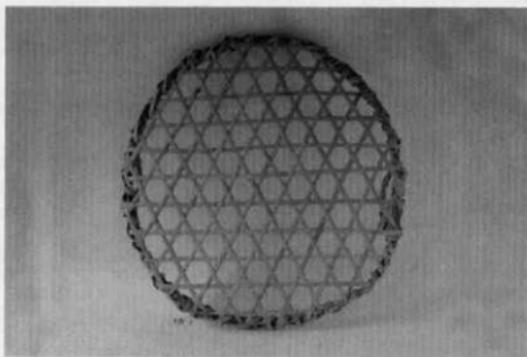


全体俯瞰

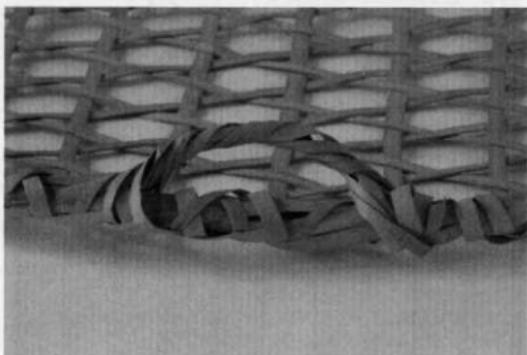
製作年月日	
用 途	シンメーナービで、ウニムーテーを蒸す時に 使用する。
材 料 素 材	ホウライチク(ンジャダキ)
材 料 尺 法 mm	縦ひご(カシ) 使用本数:36本(12本×3列) 幅:9~10 厚さ:0.5 長さ:500~800
卷ひご(ヌチ) 本数:適量 幅:9~11 厚さ:0.2 長さ:竹1本分 外縁の芯材:ツルグミの徒長枝	外縁の芯材:ツルグミの徒長枝
底の編み方	六つ目編み
伝 承 な ど	
	単位:mm
略 図	<p>寸法(直径・高さ・耳・脚の有無など)</p>
備 考	編み方は82ページ参照



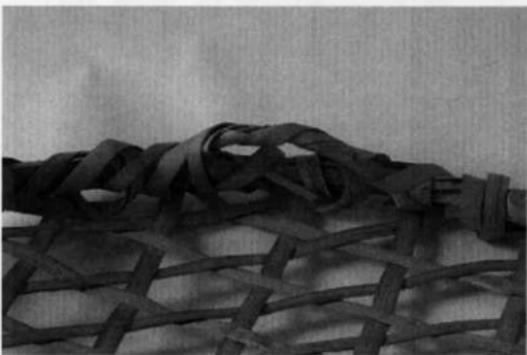
上面



底面

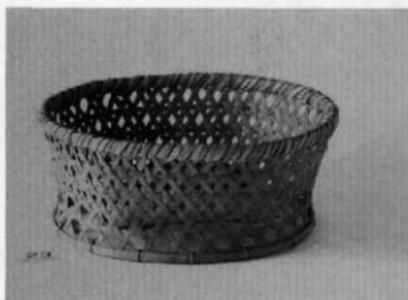


縁外側



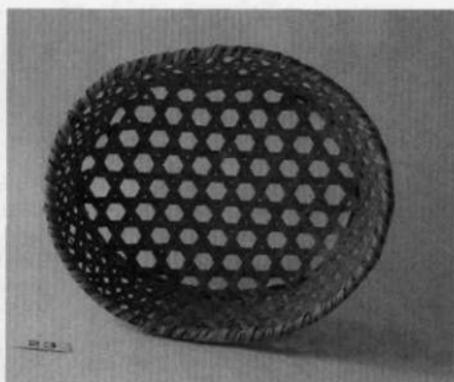
縁内側

名称	茶碗かご	収蔵品番号	2003-1-0022
----	------	-------	-------------

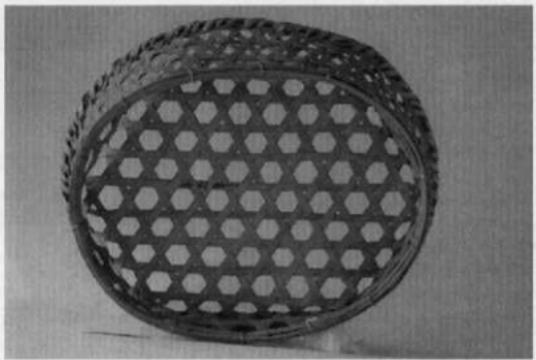


全体俯瞰

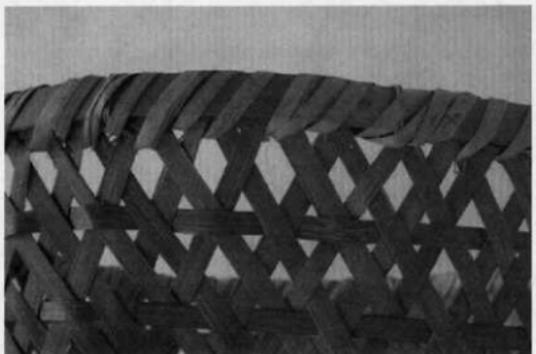
製作年月日			
用 途	茶碗や湯のみ入れ。また、果物入れとして使用した。		
材 料 素 材	ホウライチク(ンジャダキ) 維ひご(カシ) 使用本数:30本(10本×3列) 幅:6.8~7.3 厚さ:0.3 長さ:500		
材 料 尺 法 mm	巻ひご(ヌチ) 本数:適量 幅:9~11 厚さ:0.8 長さ:竹1本分		
底の編み方	六つ目編み 下の足部は後から差し込む		
伝 承 な ど			
略 図		単位:mm	
備 考		編み方は82ページ参照	



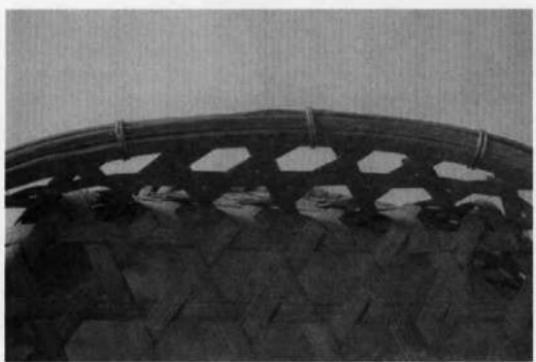
上面



底面



縁外側



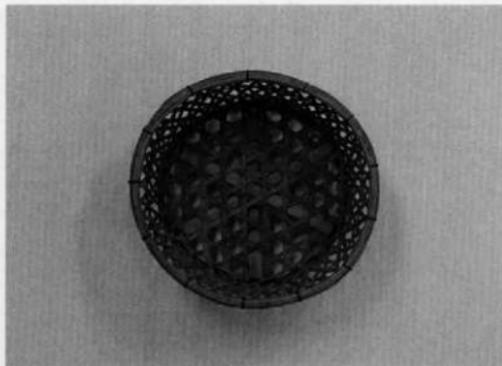
底面縁内側

名称	茶碗かご	収蔵品番号	2003-1-0023
----	------	-------	-------------



全体俯瞰

製作年月日					
用 途	茶碗や果物入れとして使用した。				
材 料 素 材	ホウライチク(ンジャダキ) 縄ひご(カシ) 使用本数:27本(9列×3本) 幅:5.5~6 厚さ:0.3 長さ:550				
材 料 尺 法 mm	補強用ひご 本数:3本 幅:14~16 厚さ:0.3 長さ:200				
底の編み方	六つ目編み 捶強材入り 下部の足のところは後から差して作る				
伝 承 な ど					
		単位:mm			
略 図	寸法(外周・高さ・耳・脚の有無など)				
備 考	編み方は82ページ参照				



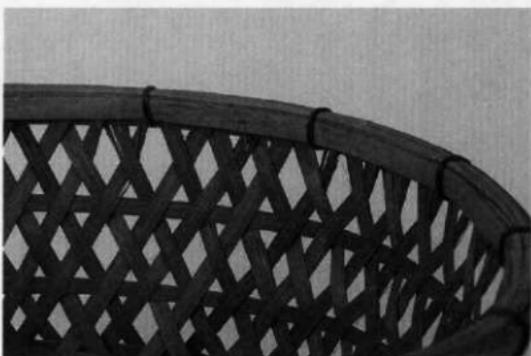
上面



底面



縁外側



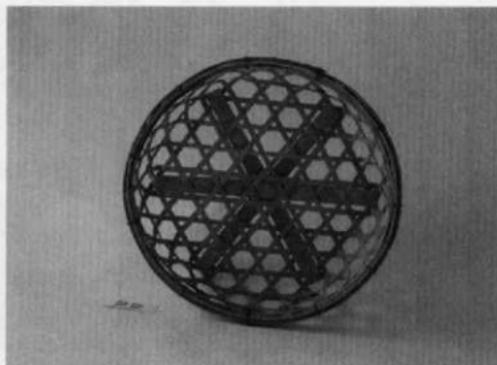
縁内側

名称	かご(六つ目編み指導用のサンプル)	収蔵品番号	2003-1-0024
----	-------------------	-------	-------------

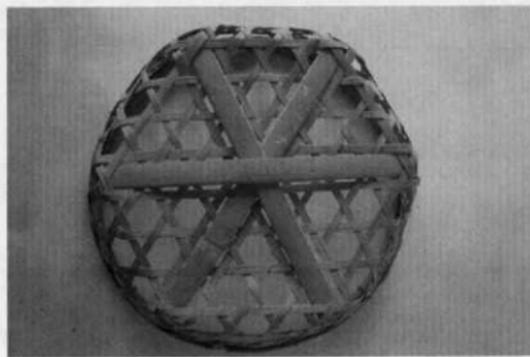


全体俯瞰

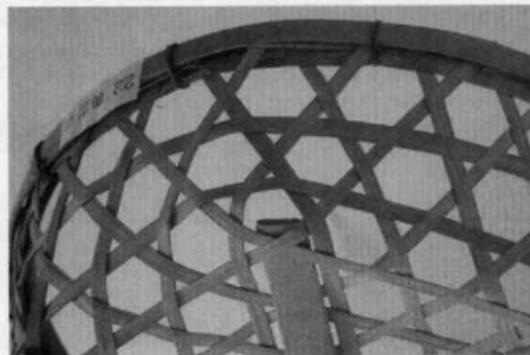
製作年月日			
用 途	小学校などで子どもたちにバーキ作りを教える時に、かごのサンプルとして作った。 底補強材をそのまま残した。		
材 料 素 材	ホウライチク(ンジャダキ) 縄ひご(カシ)		
材 料 尺 法 mm	幅:0.45~0.6 厚さ:0.3 長さ:45 底補強材 本数:3本 幅:1.5~1.6 厚さ:0.2 長さ:20.5		
底の編み方	六つ目編み		
伝 承 な ど			
略 図	寸法(外直径・高さ・耳・蓋の有無など)		
単位:mm 			
備 考	編み方は82ページ参照		



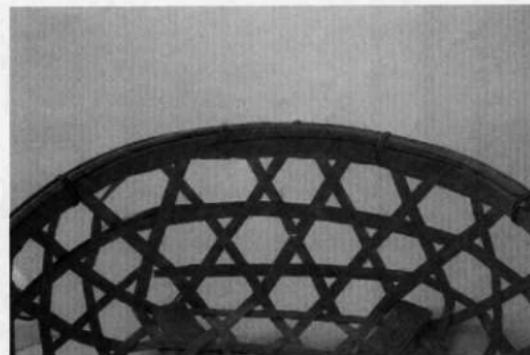
上面



底面

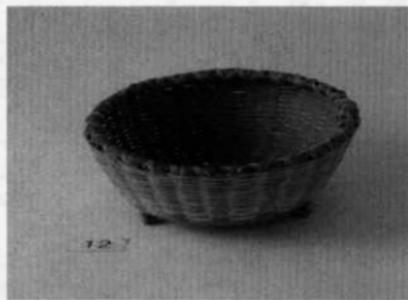


縁外側

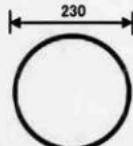
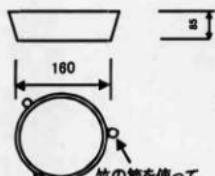


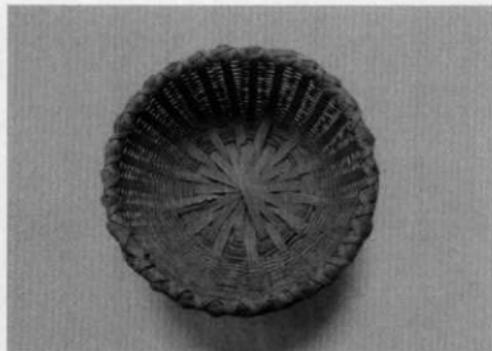
縁内側

名称	果物かご	収蔵品番号	2003-1-0025
----	------	-------	-------------



全体俯瞰

製作年月日	1953年頃 みかんなどを入れる。		
用 途			
材 料 素 材	ホウライチク(ンジャダキ) 継ひご(カシ) 使用本数:14本 幅:9 厚さ:0.3 長さ:500		
材 料 尺 法 mm	卷ひご(ヌチ) 本数:適量 幅:2.0~2.3 厚さ:0.3 長さ:竹1本分		
底の編み方	菊底編み 底の中心から10巻くらいはヌチを立てて 巻き、同じ道を通る。11巻からざる目編み で次第に立ち上げていく。		
略 図	尺法:   竹の筋を使って 3力所に 足を付けた。		
備 考			



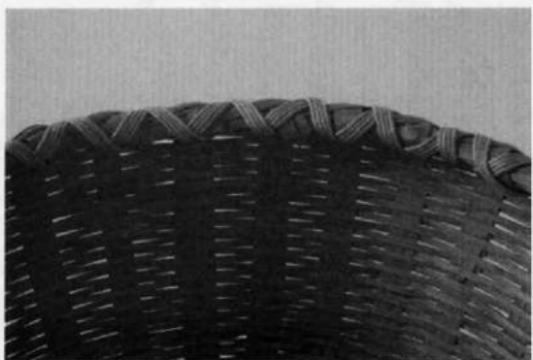
上面



底面

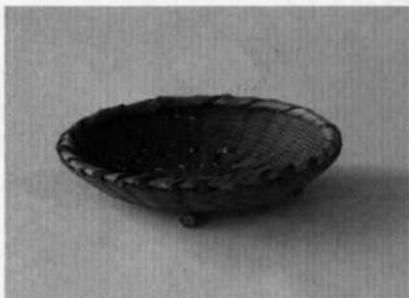


縁外側



縁内側

名称	果物かご	収集品番号	2003-1-0026
----	------	-------	-------------



全体俯瞰

製作年月日	果物を入れる。	
用 途		
材 料 素 材	ホウライチク(ンジャダキ) 糸ひご(カシ) 使用本数:16本 幅:7~9 厚さ:0.3 長さ:500	
材 料 尺 法 mm	巻ひご(ヌチ) 本数:適量 幅:2.2~2.5 厚さ:0.3 長さ:竹1本分	
底の編み方	菊底編み 底の真ん中から9巻は巻ひごを立てて同じ道を通し、10巻目からざる目編みで編む。	
略 図	単位:mm 底4カ所に足を付けてある。	
備 考		



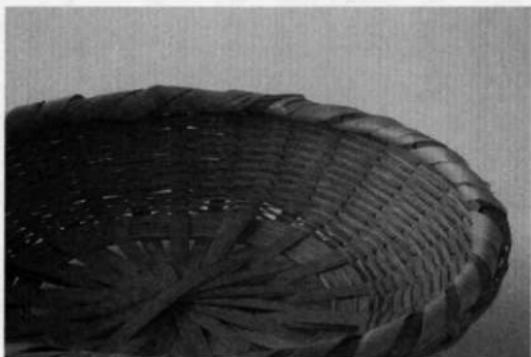
上面



底面



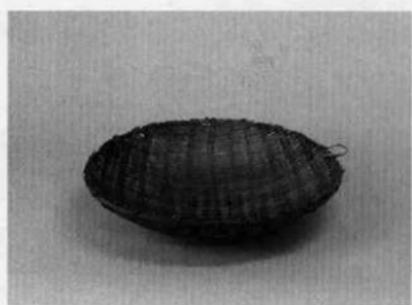
縁外側



縁内側

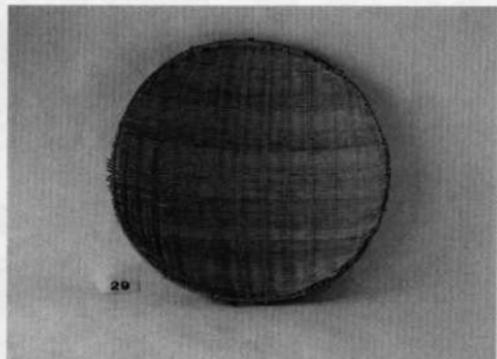
名称	ソーキ
----	-----

収集品番号 2003-1-0027

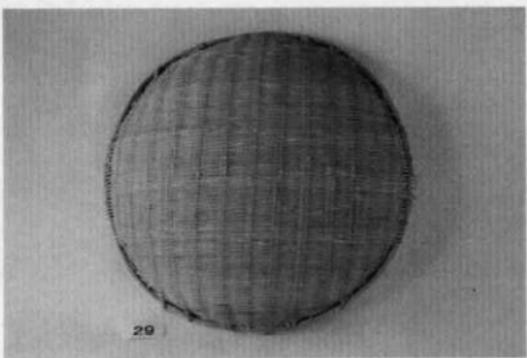


全体俯瞰

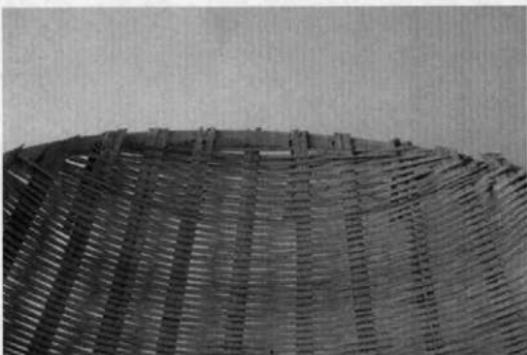
製作年月日		
用 途	洗った野菜の水切り等に使用。	
材 料 素 材	ハウライチク(ンジャダキ)	
材 料 尺 法 mm	緩ひご(カシ) 使用本数: 22本(11列×2本) 幅: 5~7 厚さ: 0.3 長さ: 350~530 卷ひご(ヌチ) 本数: 適量(外皮を軽く剥つてある。) 幅: 1.7~2 厚さ: 0.8 長さ: 竹1本分	
底の編み方	ざる目編み	
伝 承 な ど	未完成であるが、製作過程を 知る事ができる。	
略 図	単位:mm 尺法(直径・高さ・厚さの有無など)	
備 考		



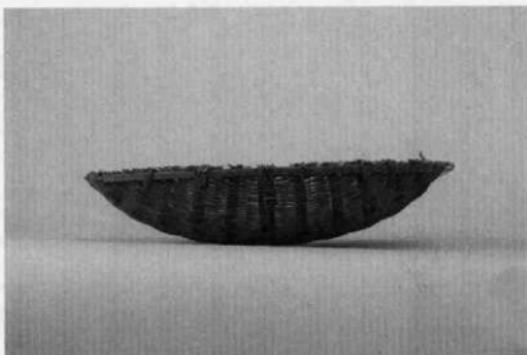
上面



底面



縁内側



縁外側

名称	カジラーティール	収蔵品番号	2003-1-0028
----	----------	-------	-------------



全体俯瞰

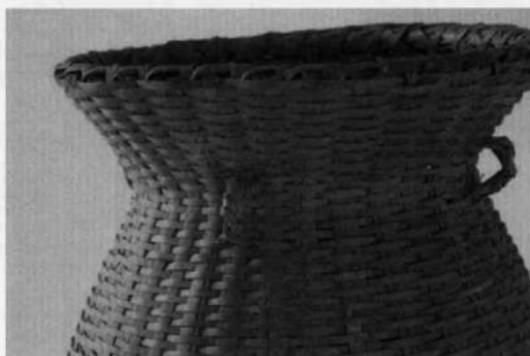
製作年月日		
用 途	ヤマモモの実を入れるのに使用した。 耳に紐を通して、腰に結んで使用した。	
材 料 素 材	ホウライチク(シジャダキ)	
	縄ひご(カシ) 使用本数: 32本(8列×2本×2方向) 幅: 5~6 厚さ: 0.3 長さ: 850	
材 料 尺 法 mm	卷ひご(ヌチ) 本数: 通量 幅: 2.2~3.5 厚さ: 0.8 長さ: 竹1本分	
底の編み方	網代編み(補強材4方向に入る)	
伝 承 な ど	山モモをとる時に使った。 山内、諸見里、上地で使用された。 4力所に耳有り。	
単位:mm		
略 図	寸法(外直径・高さ・耳・耳の有無など)	
備 考		編み方は87ページ参照



首部分



底面

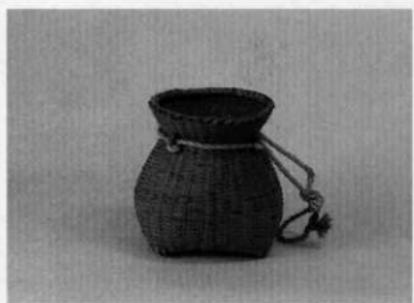


縁外側

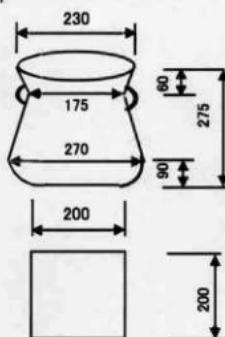


縁内側

名称	カジラーティール
收蔵品番号	2003-1-0029

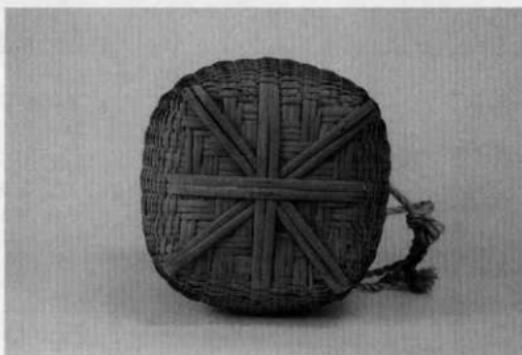


全体俯瞰

製作年月日	不明
用 途	ヤマモモの実を入れるのに使用した。 耳に紐を通し、腰に結んで使用した。
材 料 素 材	ホウライチク(ンジャダキ) 綾ひご(カシ) 使用本数:36本(9列×2本×2方向) 幅:7~9 厚さ:0.3 長さ:1,100
材 料 尺 法 mm	卷ひご(ヌテ) 本数:適量 幅:3~4 厚さ:0.3 長さ:竹1本分
底の編み方	網代編み(補強材4方向に入る)
伝 承 な ど	山モモをとる時に使った。 山内、諸見里、上地で使用された。 4力所に耳有り。
略 図	寸法(直径・高さ・耳・紐の有無など) 单位:mm 
備 考	編み方は87ページ参照



首部分



底面



縁外側



縁内側

名称	つりかご	收藏品番号	2003-1-0030
----	------	-------	-------------

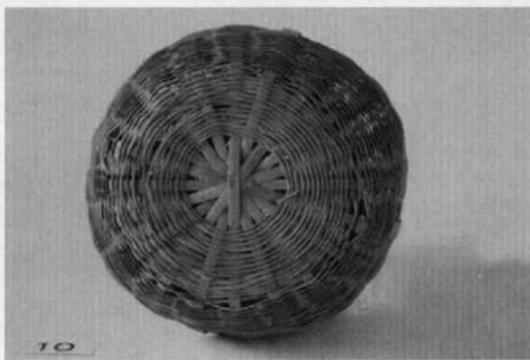


全体俯瞰

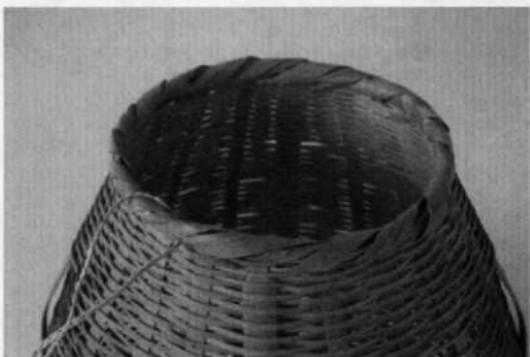
製作年月日	1983年頃	
用 途	漁をしている間、生け簀代わりに海につけておく。魚が逃げないように蓋が付いている。	
材 料 素 材	ホウライチク(ンジャダキ) 縄ひご(カシ) 使用本数:10本 幅:5.8~6.6 厚さ:0.3 長さ:700	
材 料 尺 法 mm	巻ひご(ヌチ) 本数:適量 幅:2 厚さ:0.3 長さ:竹1本分	
底の編み方	菊底編み	
伝 承 な ど	石川先生から教わって作った。 耳4力所(耳に紐を通して使った。)	
略 図	単位:mm 	
備 考	寸法ハ蓋部・高さ・耳・蓋の有無など	



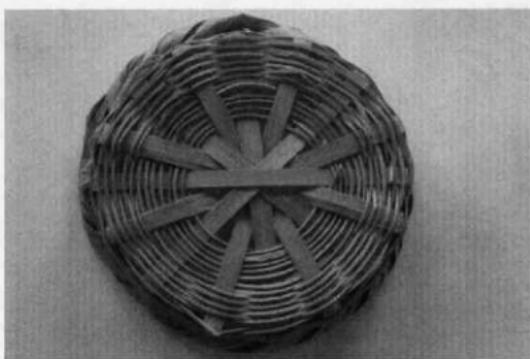
蓋の内部



底面



縁外側

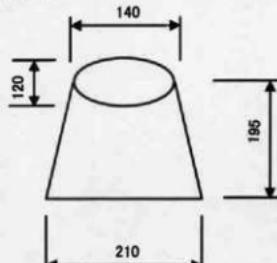


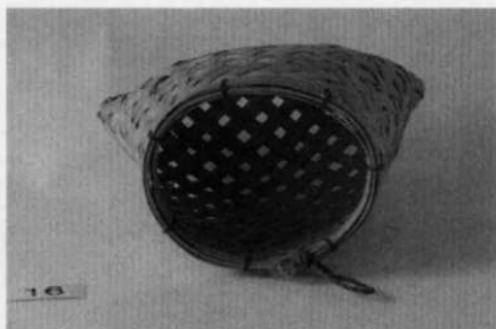
蓋の底面

名称	チリカゴ	収蔵品番号	2003-1-0031
----	------	-------	-------------

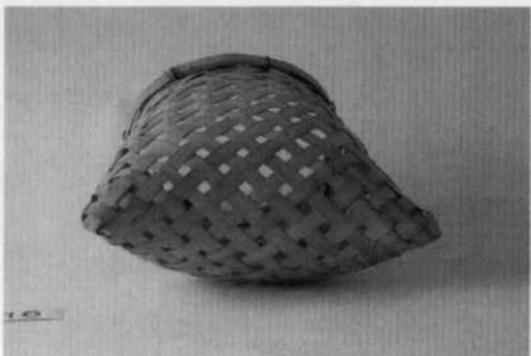


全体俯瞰

製作年月日	1973年頃
用 途	机の横に下げるゴミ入れとして使用した。
材 料 素 材	ホウライチク(ンジャダキ) 縦ひご(カシ) 使用本数: 32本(8列×2本×2) 幅: 9~10 厚さ: 0.8 長さ: 1,200
材 料 尺 法 mm	巻ひご(ヌチ) 本数: 適量 幅: 9~11 厚さ: 0.8 長さ: 竹1本分
底の編み方	
伝 承 な ど	材料はワタの部分を使うので材料の 節約が出来る。 作り方は17才の磯石川先生に教わった。
略 図	寸法: mm 单位:mm 
備 考	



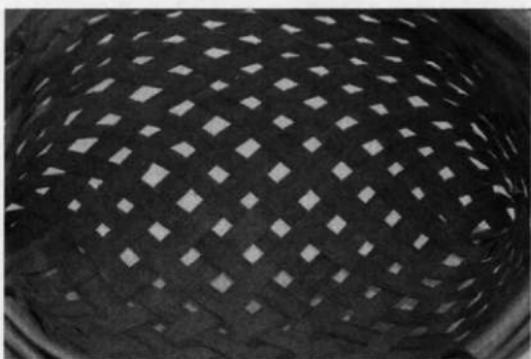
上面



底面



侧面(使用状況)



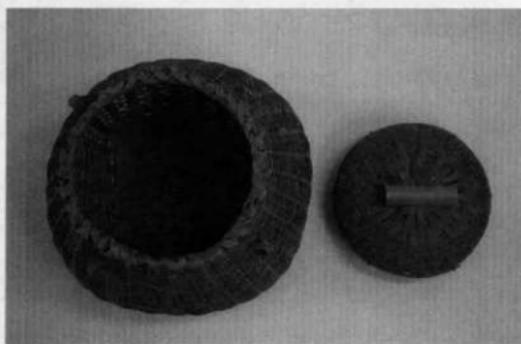
内面

名称	ウミディール	収集品番号	2003-1-0032
----	--------	-------	-------------

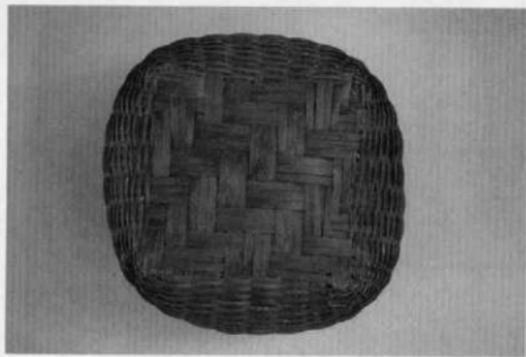


全体俯瞰

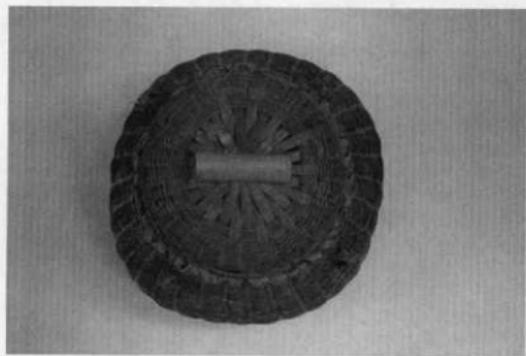
製作年月日	釣った魚を入れるのに使った。	
用 途		
材 料 素 材	ホウライチク(ンジャダキ) 縄ひご(カシ) 使用本数:32本(8列×2本×2)方向 幅:6.5~8 厚さ:0.3 長さ:950	
材 料 尺 法 mm	巻ひご(ヌチ) 本数:適量 幅:2.5~3.5 厚さ: 長さ:竹1本分	
底の編み方	網代編み 蓋は菊底編み	
伝 承 な ど	耳4カ所(耳に紐を通して使った。)	
単位:mm		
略 図	蓋部	
	本体	
備 考 編み方は87ページ参照		



蓋を外した状態



底面



上面



蓋の内側

第3章 パーキの作り方

作図：木下義宣

パーキづくりの極意は
編み方にあらず
ヒゴ作りにあり…

アラバーキの作り方（底の編み方）：網代編

材料

- ケ（ホウライケ）の外側の節を
ナタでさし、竹の汚れはぬれた布で
ふきとる。
- 竹を120cm×30cm 4本（糸従ヒゴ用）。
- 巻ヒゴ用に長い竹1本準備する。
- 竹を8等分に割る（幅約14mm）
糸従ヒゴ 32本、巻ヒゴ 10本作る。

一一三四五六七八



図1

①糸従ヒゴ（カシと言ふ）を皮を
上にして 2本を1組で 1列
とし、足で押えながら 8列並
べる。（長い板で押えてもよい）

季ひ1列 本

同じ長さ 同じ長さ

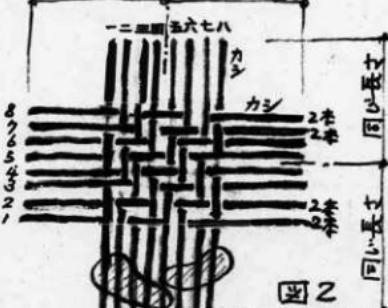


図2

あい3 この底の編み方を網代編といふ

2列目：左から2列を上げ（一・二
列）下から通し、三四列の上か
ら通り、五六列の下、七八列の上
を通り。

5列目：1列目と同じ

2列目：左から1列を上げ
下から通り、二・三列の上、
四・五列の下、六・七列の上、
八列の下を通り。

6列目：2列目

3列目：左から二列（一・二列）の上
三四列の下、五六列の上、七八
列の下

7列目：3列目

4列目：左から一列の上、二・三列の
下、四五列の上、六・七列の下、
八列の上

8列目：4列目

③巻ヒゴ（ヌチと言ふ）を巻く

ア：ヌチをバの右、8・7・6下から2列
くぐらせ 6・5の上、4・3の下、
2・1の上 以下 同じように1周
りさせる。七八列目は右上の注意
書きのようにする。

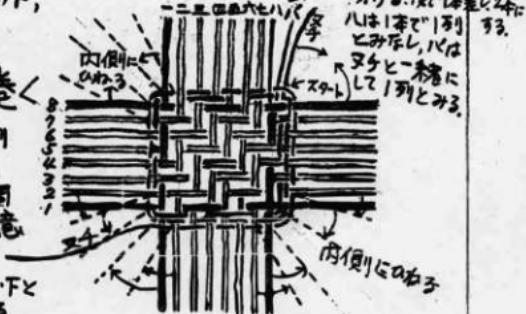
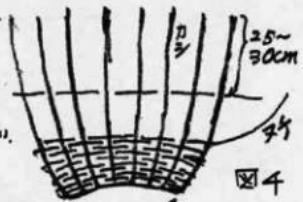


図3

④2回り目からは1列ごとに上・下と
交互にいく。角はきっちり折る。

四隅の
カシを内側にひかる。(これは立ち上がるまで未だける)

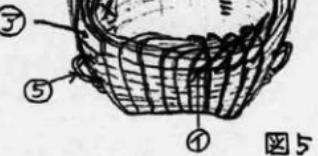
⑦ 8~10回位巻いたら ひっくり返しし、さらにヌチを巻いていく。最後まで“返し立てる”や“こどり立てる”のところまで止める。(図-4)



④ 上縁を巻く

⑦ 4等分した長い竹ヒゴで、上縁の内側に入る輪輪を作る(2回位)などように)。重なる15cm位は薄くしておく。(竹の長さ=直径×3.14×2+α)

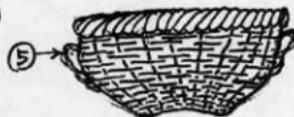
① 立てているカシの先端を4~5本束ねて、その右側のカシで⑦の輪輪と一緒に巻きこむ。巻きこんだカシは後で干すときの空いた穴にカシの先端を差し込む。(割りばし状の竹を4~5本巻きこんでよい。)



⑤ 耳をつくる。

4隅の上から2~3段のところに

耳を編む。出来上がり。



完成図

耳中12回位
もいた



内側から見た耳の位置

耳用の巻ヒゴ あつて 0.6mを長さ1m位。

⑦ とから9割目の下から差し込む(5回位多い)
⑧ 上から8割目以上(4割目と9割)に差し、内側に余がんにし、
差し込む所側面を出る。

⑨ 韓指が入るくらい
おさしめる。

⑩ 差し込む側から
差し込む

⑪ 縦ヒゴの内側に余がん(X字
に差し込む)し、9割目の左側を出す。

⑫ ⑩~⑪を2回くり返し、
余った巻きひごを内側に
巻きこむ完成。

⑬ 四隅に作った耳の穴に
糸を通して繋ぐ



⑭ 完成図

ミージョーキの作り方

：連続ますあじろ十四方あじろ高編み

→ポイント：竹ヒコの中と厚さをそろえること。

材料

・縦ヒコ（方言でカシと言う）：竹の表皮（一番が）を使う

・中10mm、厚さ0.4～0.5mm、長さ80cm→1本（真中のヒコとなる）。

・中8mm、厚さ0.4～0.5mm、長さ80cm→26本・70cm→20本・60cm→20本・50cm→10本（中心部は長く、外側は短いヒコを使う）⇒合計75本

・横ヒコ（カシ）：竹の肉質部（身竹：方言で二番ヒコ、三番ヒコと言う）を使う

・中10mm、厚さ0.4～0.5mm、長さ80cm→1本（真中で使用する）

・中8mm、厚さ0.4～0.5mm、長さ80cm→26本・70cm→20本・60cm→20本・50cm→10本 ⇒合計75本

・口縁竹：中20mm、厚さ3mm、長さ2m→4本、中9.4mm、厚さ3mm、
(2本は中10~15mm)

長さ2m→1本

・ステンレス製金針 #20(φ0.9mm)

編み方

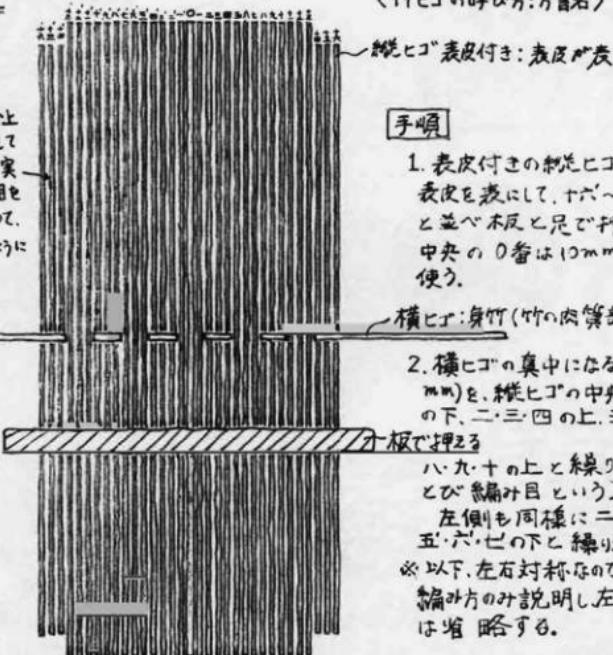


図1

手順

1. 表皮付きの縦ヒコ(80cm)を表皮を表にして、十六～〇～十六と並べ木反と足で押える。中央の〇番は10mm中のヒコを使う。

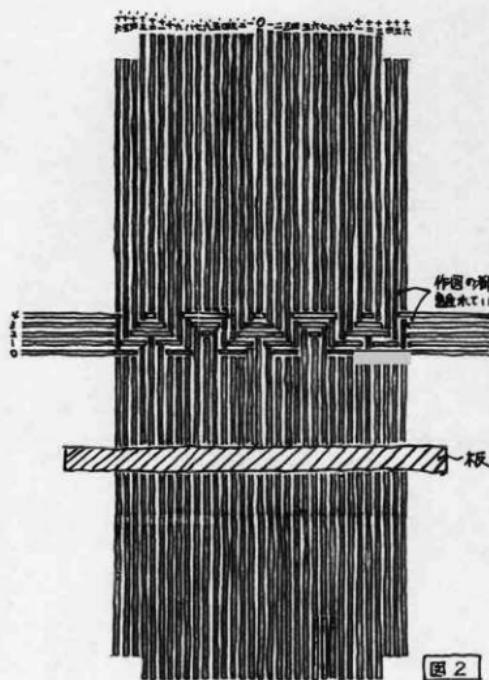
—横ヒコ: 身竹(竹の肉質部分)

2. 横ヒコの真中になる身竹(中10mm)を、縦ヒコの中央部一〇の下、二・三・四の上、五・六・七の下、オ板で押える

ハ・九・十の上と繰り返す(三本とび編み目という)。

左側も同様に二・三・四の上、五・六・七の下と繰り返す。

※以下、左右対称なので、右側の編み方のみ説明し左側の説明は省略する。



3. 横ヒゴ¹を入れる。縦ヒゴ¹の中央〇番の下、一・二・三の上、四・五・六・七・八の下(三本とび^{編み目})、九・十・十一の上、十二の下、十三・十四・十五の上、以下三本とび^{編み目}で下、上、下と繰り返し。

4. 不横ヒゴ²を入れる。
縦ヒゴ²ニ・一・〇・一・ニの上(三本とび)
三・四・五の下(三本とび)、六の上(一
自^じ)、七・八・九の下、十・十一・十二・十三
十四の上、十五・十六…の下、以下三
作図の都合上ヒゴとヒゴが
重なっているが、実際には密着する。
本目とびで繰り返す。

5. 横ヒゴ³を入れる。
縦ヒゴ¹〇・一の上、二・三・四の下、
以下三本とび^{編み目}を繰り返す。

6. 横ヒゴ⁴を入れる。
縦ヒゴ¹〇の上、一・二・三の下、四・五・六・七・八の上、九・十・十一の下、十二の上、十三・十四・十五の下、以下三本とび^{編み目}を繰り返す。

図2

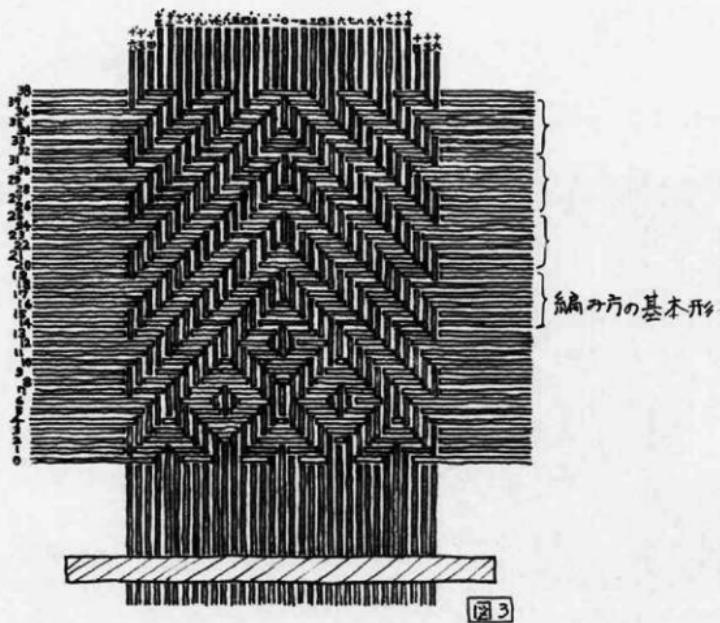


図3

7. 横ヒゴ 5を入れる。

縦ヒゴニードルの下(五本とび)、三・四・五の上(三本とび)、六の下(-目)、七・八・九の上(三本とび)、十・十一・十二・十三・十四の下(五本とび)、以下三本とびあいの繰り返し。

8. 横ヒゴ 6を入れる。

縦ヒゴ一・〇・一の下、二・三・四の上、以下三本とびあいの繰り返し。

9. 横ヒゴ 7を入れる。

縦ヒゴニードルの下、三・四・五の上、六の下、七・八・九の上、以下三本とびあいの繰り返し。

10. 横ヒゴ 8を入れる。

縦ヒゴ〇の上、一・二・三の下、四・五・六・七・八の上、九・十・十一の下、以下三本とびあいの繰り返し。

11. 横ヒゴ 9を入れる。

5. 横ヒゴ3と同じ。

12. 横ヒゴ 10を入れる。

縦ヒゴニードルの上、三・四・五の下、六の上、七・八・九の下、以下三本あいの繰り返し。

13. 横ヒゴ 11を入れる。

縦ヒゴ〇の下、一・二・三の上、四・五・六・七・八の下、以下三本あいの繰り返し。

14. 横ヒゴ 12を入れる。

縦ヒゴ一・〇・一の下、二・三・四の上、以下三本あいの繰り返し。

15. 横ヒゴ 13を入れる。

縦ヒゴ〇の下、一・二・三の上、以下三本あいの繰り返し。

16. 横ヒゴ" 14を入れる。

縦ヒゴ" 二'・一'・〇・一・ニの上, 三・四・五の下, ニ以上 三本とひ"あじろ"の繰り返し。

17. 横ヒゴ" 15を入れる。

横ヒゴ" 3, 9と同じ。

18. 横ヒゴ" 16を入れる。

縦ヒゴ" 〇の上, 一・ニ・三の下, 以下
三本とひ"あじろ"の繰り返し。

19. 横ヒゴ" 17を入れる。

縦ヒゴ" 二'・一'・〇・一・ニの下, 三・四・五の上, 以下 三本とひ"あじろ"の繰り返し。

20. 横ヒゴ" 18を入れる。

横ヒゴ" 〇, 6, 12と同じ,(三本とひ"あじろ")

21. 横ヒゴ" 19を入れる。

縦ヒゴ" 〇の下, 一・ニ・三の上, 以下
三本とひ"あじろ"の繰り返し。

22. 横ヒゴ" 20を入れる。

縦ヒゴ" 二'・一'・〇・一・ニの上, 三・四・五の下, ニ以下 三本とひ"あじろ"の繰り返し。

23. 横ヒゴ" 21を入れる。

横ヒゴ" 3, 9, 15と同じ。

24. 横ヒゴ" 22を入れる。

横ヒゴ" 16と同じ。

25. 横ヒゴ" 23を入れる。

横ヒゴ" 17と同じ。

26. 横ヒゴ" 24を入れる。

横ヒゴ" 18と同じ。

27. 横ヒゴ" 25を入れる。

横ヒゴ" 19と同じ。

28. 横ヒゴ" 26~31, 32~37, 38~を

横ヒゴ" 14~19を基本的編み方として
これと同じように編んでいく。

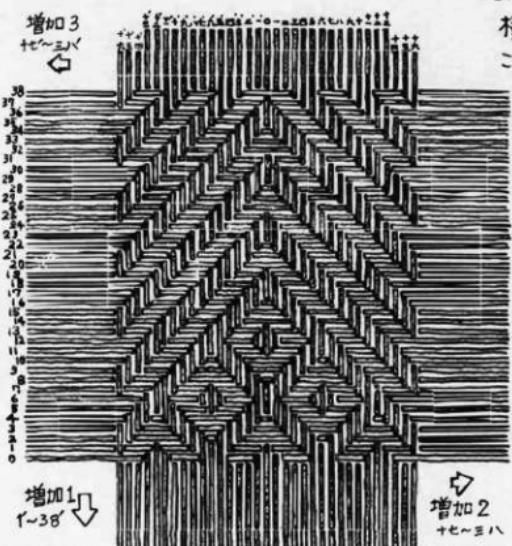
29. 下の方に 1'~38'を編む。
体の向きを変えて、横ヒゴ" 1'~38'を 1~38と同じように
編んでいく。

編み方の基本形

30. 右側に十七~三八を編む。

縦ヒゴ" 十七~三八を三本
とひ"あじろ"で編む。

31. 左側に十七~三八を編む。
縦ヒゴ" 十七~三八を三本とひ"
あじろ"で編む。(底編終了)



《底編完成図：連續ますあじろとますあじろの組み合わせ》
(中央部分) (周辺部)

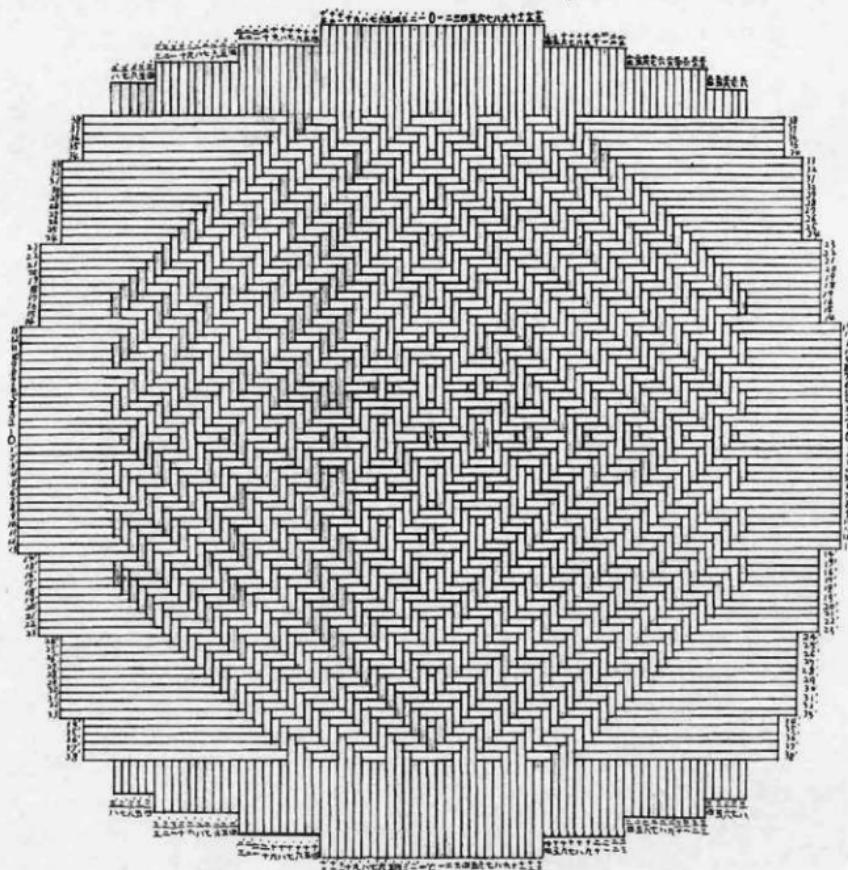


図 5

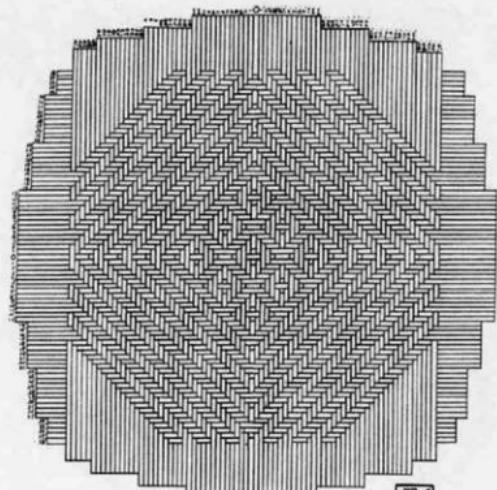


図6

32. 図5の編み終えたのを 皮が裏になるように裏返す。(図6)

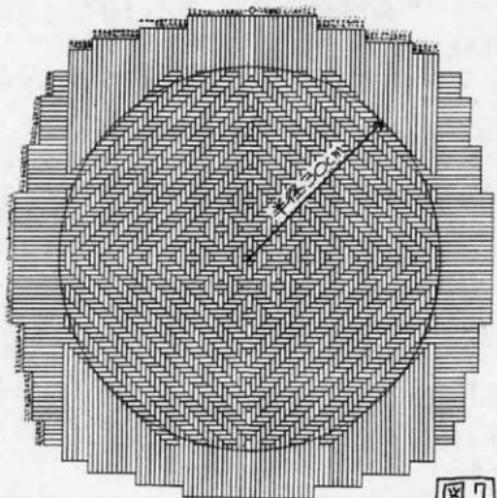


図7

33. 編みの中心から半径30cmの円を 棒や鉛筆を使って描く。(図7)
円周の線に沿って テケヒコを内側に曲げる。長くて余分なヒコは、
切り取る。



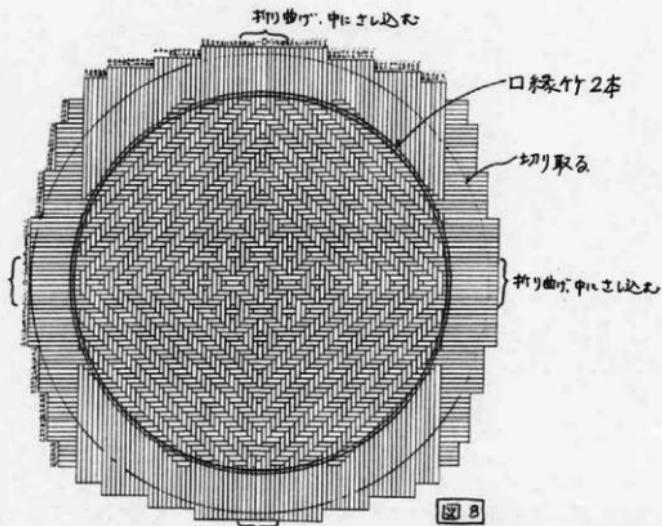


図8

34. 直径60cmの口縁竹(2本は巾20mmで上段に使用、2本は巾10~15mmにし下段に使用する)を作る。内側になるのは、外皮を内側に、外側になるものは、外皮を外側にに向けて作る。(図9)
 直径60cmの円周は、 $3.14 \times 60 = 188.4\text{cm}$ になる。



図9

35. 上の口縁竹を入れる。先ず、外側を下から入れ、後に内側を上から入れ、金針で固定する。中央部四ヶ所の約10本をそれぞれすり曲げて中にさし込む。
 中央部の10本を
 切り曲げ、中にさし込む。
 残りは切り取る。
 切り取る時は下の
 竹縁竹を入れた後じよい。

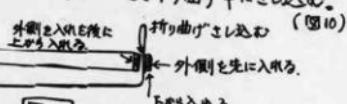


図10

36. 下の口縁竹を上と同じ要領で入れ、お甲えの糸縁竹を上から入れ、金針で束す。

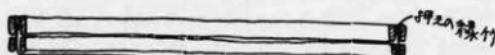


図11

ミーショーキ 完成図

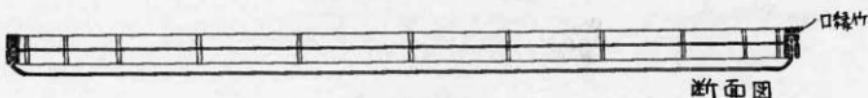
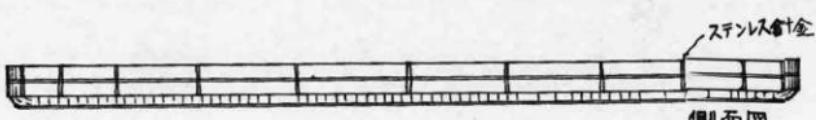
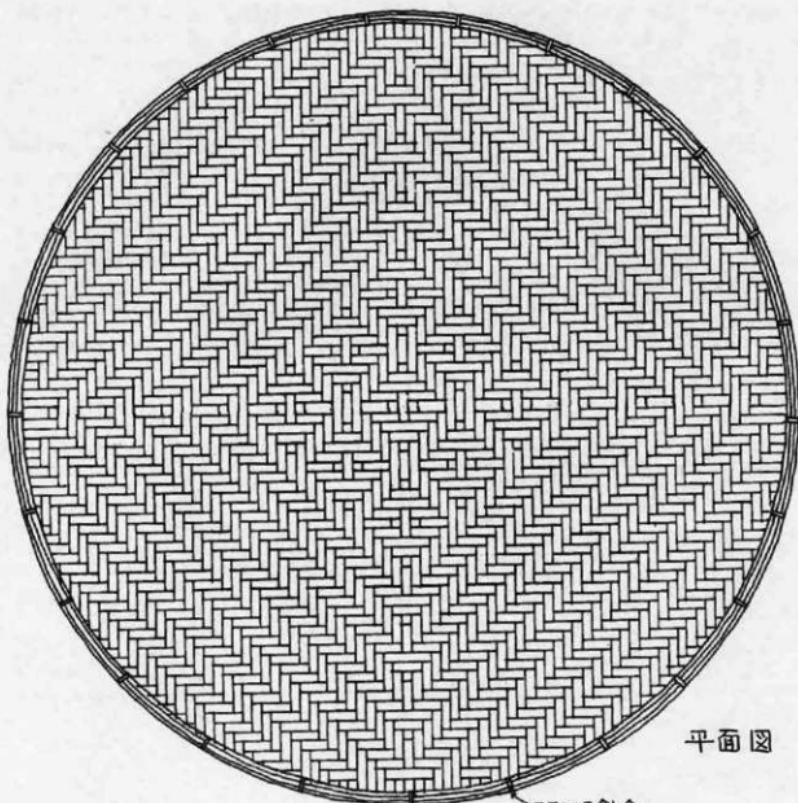


図12

六つ目かごの編み方

木材 (かご)

・縦ヒゴ：長さ60cm、巾6~7mm、厚さ0.3mm
 $12 \times 3 = 36$ 本 中をぞろそろこと。

・巻きヒゴ：長さ140cm、巾6~7mm、厚さ0.3mm
 ~ 0.5
 2本

・縁巻きヒゴ：長さ140cm、巾13~15mm、厚さ1.5mm
 2本
 両端の重なる部分は薄くする。
 長さ140cm、巾2mm、厚さ1.5mm
 1本

・ヘラケツ：長さ約60cm、巾10~12mm、厚さ1.5mm
 3本
 →六角形の頂点の対角線の長さ。

・ステンレス金針 金 中0.9mm(#20) 2m

編み方（底を編む）

- ・縦ヒゴを外皮が表になるように横に1本置く。1のヒゴ。
- ・2のヒゴの中間点と1の中間点位で60°で交差させる。(2脚下)

図1

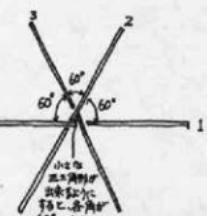
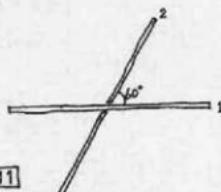


図2 3を2の上、1の上を通して交差させ。各々が60°を交わるようにする。

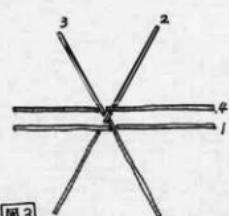


図3 4を2の上、3の下を通して差し入れる。

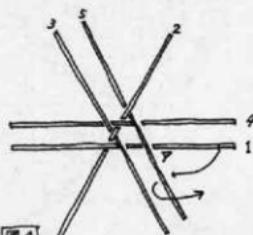


図4 1と5の交差点で1と5の上下を入れ替え1を5の上にする。(下図)

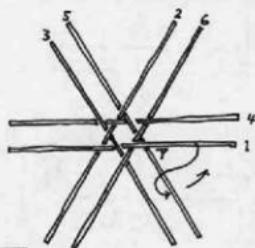


図5 6を2と平行に差し込む。1と5の上下を入れ替え5を上にする。

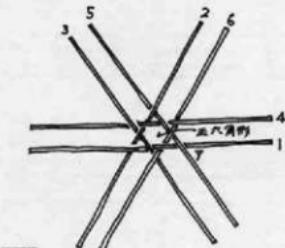
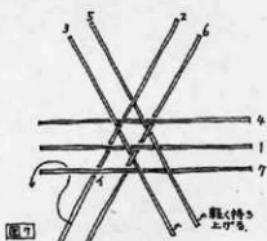


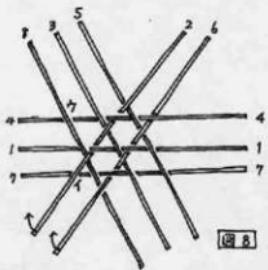
図6 6がはすれなくなる。中央の空間が正六角形になる。



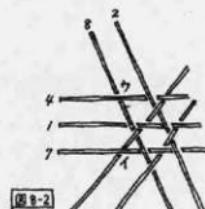
図4-2



3と5の右下を軽く持ち上げ、7を
5・3の下から2・6の上へ通す。
1点ごとに2と7を上下入れ替え、
2が上、7が下になるようにする。

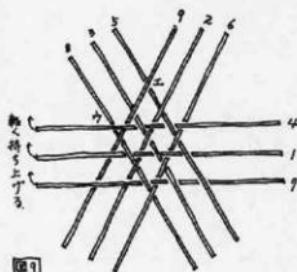


2と6の左下を軽く持ち上げ
8を2・6のF、7・1・4の上へ差し
込む。



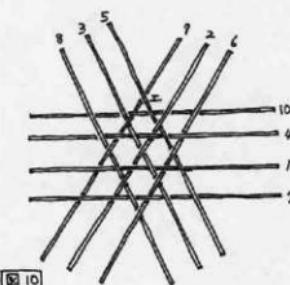
1点ごとに2と7の上下を
入れ替え、7が上2が下
に来るようとする。8が
はずれなく居る。

ウ点の8と4の上F
を入れ替え、4が上
8が下に来るようとする。



4・1・7を左側を持ち上げ、9を4・1・7
の下、8・3・5の上から入れる。

ウ点の8と4の上下を入れ替え、4が下、
8が上に来るようとする。9が抜けなくなる。



10を入れるため 工点で5と9の
上下を入れ替える。5が上 9が下にな
るようとする。

10を入れた後、10が抜けないよう
にするため 5と9を入れ替える。

以下 同様に増していく。

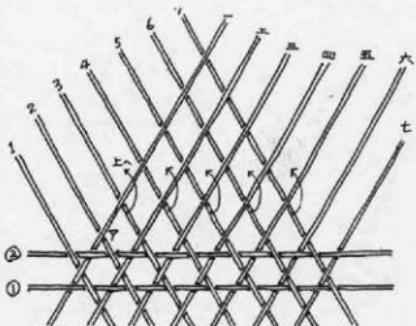


図11 ヒゴカゲ増えてきたら?

下になつてゐる左斜めの向きの3・4・5・6・7を
右斜め向きの一・二・三・四・五の上にする。(左斜め
向きが上になつてゐるのを、左斜め向きのものが上
になるようにする。)

《数字は図1～図10までと無関係》

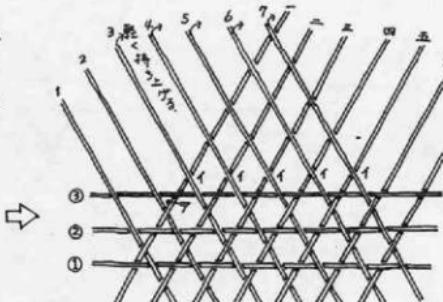
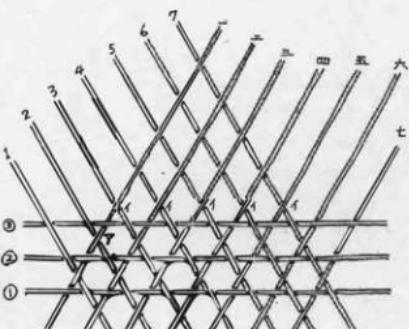


图 12

3・4・5・6・7を軽く持ち上げ、③をア並で1～7の下、一～七の上になるよう入れる。

③が抜けないようにするために、1点で3と一、4と二、5と三、6と四、7と五の上下を入れかえる。図13のようになる。



13

・1点を交じり変えると③のヒコ"が"はず"になくなる。

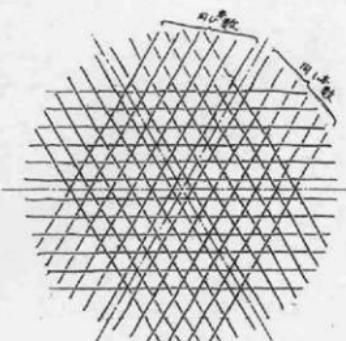


図14 底が赤褐色となり、裏がえぐた状（表皮側）

・六角形の頂点を中心^トに、竹ヒゴは左右同じ数になる。

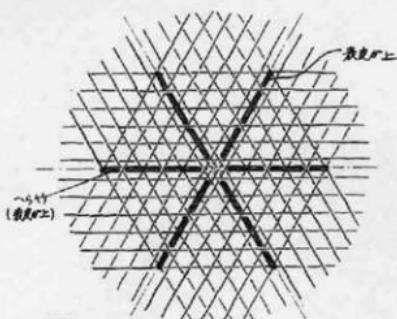


図15 底の補強

底を補強するため、へら竹を図のように三本入れる。中央では表裏にコを差し込まない。へら竹は表裏を上にする。

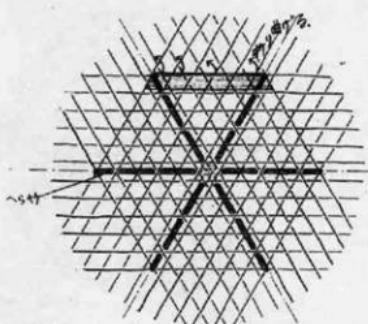


図16 六辺を折り曲げる

六角形の各辺に板を当て、内側に折り曲げる。

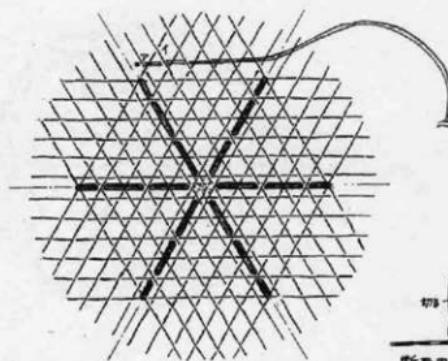


図17 立上げ

巻きヒゴをA点に差し込む。導筋に表裏ヒゴを1個で、図12のように組み変えておく。巻きヒゴを入めたら又元のように組み変える。
一周りしたら 15~20cm重なる。

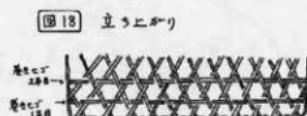
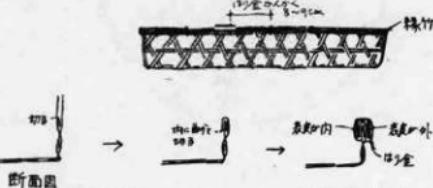
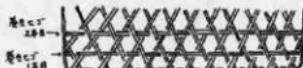
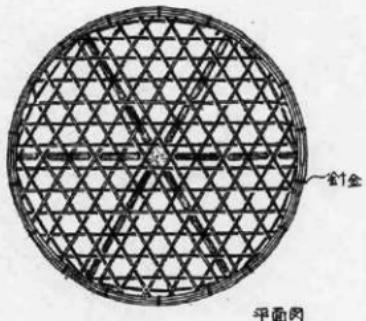


図18 立上げ



断面図
内側ヒゴは切り取る
外側ヒゴは内に曲げて
切る

縁竹を内と外から
はさむ。上に細竹を入れ
はり金をしづら。



平面図



図19 完成図(果物かご) 側面図

ムチウブ'サー

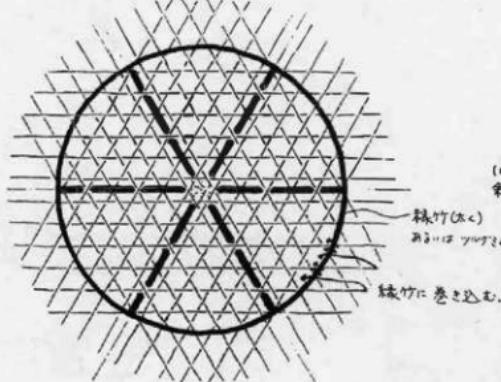
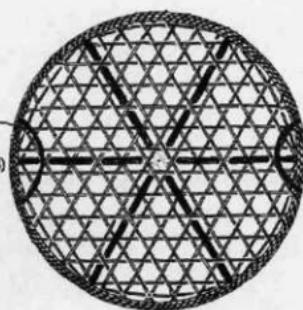


図20 ムチウブ'サーの縫仕工法

- ・少し太目の 緩竹 もあるいは、ツルゲミの
枝を 円筒形にし、それに 縦ヒゴの
余省を巻き込む。
- ・取手を 内側に シレ 金子めにして
取り付ける。



平面図

図21 ムチウブ'サー完成図

側面図

ティールの作り方

ここで紹介するティールの作り方は、本稿のティール製作技術ではないが、基本的な技術として掲載した。

竹の選び方

- 2~3年物の竹を選ぶ。節の近辺に白い粉のような物が着いているのは、1年物の竹なので取らない。堅そうな物から選ぶ。体験で覚えるしかない。
- 虫食いで穴の空いた物や、途中から枝がでているのは出来るだけ取らない。
- ヤンバルの野山に生えているホウライチク(インジャダキ)を使う。
- 切り倒すときは、裂けない工夫をする。切り口の乾燥を防ぐため、節の下で切ると良い。使うときは節を落とす2~3日で使い切るときは、節の上で切り落としてもよいが、裂けない工夫をする。
- 切り倒すには、廻し鋸を使うと良い。

必要な長さに切る

- 竹の外節を落とし、表面の汚れをスカッチャイトや濡れた布で拭き取る。
- 縦ヒゴ(方言でヌチと言う)用の竹を110~120cm位に切る。3~4本必要。
- 巻きヒゴ(ヌチ)用の竹は切らずに長い物(4m位の物)をそのまま使う。3~4本必要。

竹の割り方(ダギワイ)

- 竹は末から割る。(木元竹末:きもとたけうら→木は根元の方から割り、竹は末から割るときれいに割れるという諺)
- 竹をアジャー(くもで)を使い、4等分する。内節を落とし、二つに割る。(8等分)竹の径が小さいのはこれで終了。径の大きいのはさらに二つに割り16等分にする。
- 割った竹の幅を必要な幅(今回は7~9mm)にする。
- 竹は同じ角度で割していくとよい。大きく曲げた方に竹は薄くなってしまって切れてしまう。(図1参照)

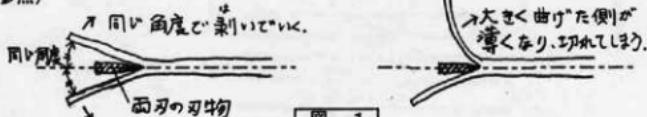


図 1

竹ヒゴをつくる(ヒジトウイ)

- 割った竹を外皮と内肉に2等分するように剥いでいく。決して削ってはいけない。(図1参照)
- 一番ガード(外皮)、(二番ワタ、三番ワタ、四番ワタ…竹の身だけの物で今回は使わない)
- 縦ヒゴ(長さ: 110~120cm位、幅: 7~9mm、厚さ: 0.3~0.5mm両端25cm位は薄目に)
→24本
- 巻きヒゴ(4m位:長い竹1本分、幅: 7~9mm)→→20~30本:必要な分

編み方

- 底を編む(シチグン)→縦ヒゴを入れて周辺を編み(スクマーシ)→→徐々に立ち上げていく(タチアギ)→縫仕上げ(マグイ)→ミミチケー(耳付け)

底の編み方①: 條(いかだ)編み

1列 2 3 4 5列→奇数列

2本

中心

2本

3本

4本

5本

6本

7本

8本

9本

10本

11本

12本

13本

14本

15本

16本

17本

18本

19本

20本

21本

22本

23本

24本

25本

26本

27本

28本

29本

30本

31本

32本

33本

34本

35本

36本

37本

38本

39本

40本

41本

42本

43本

44本

45本

46本

47本

48本

49本

50本

51本

52本

53本

54本

55本

56本

57本

58本

59本

60本

61本

62本

63本

64本

65本

66本

67本

68本

69本

70本

71本

72本

73本

74本

75本

76本

77本

78本

79本

80本

81本

82本

83本

84本

85本

86本

87本

88本

89本

90本

91本

92本

93本

94本

95本

96本

97本

98本

99本

100本

101本

102本

103本

104本

105本

106本

107本

108本

109本

110本

111本

112本

113本

114本

115本

116本

117本

118本

119本

120本

手順1: 縦ヒゴを斜間に並べる。

⑦ 縦ヒゴ2本を1列とし、5列を両足又は反対で並べる。

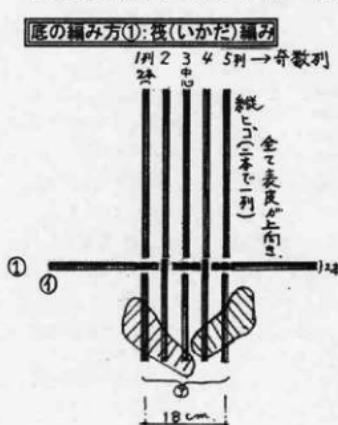
⑧ 縦ヒゴ①を横にし、1列の上、下F、3列の上、4列のF、5列の上を通る。

⑨ 3列目が中央になるように左右の長さを調整する。

縦ヒゴの長さ: $l = a + 2b + 2c$

注: $c = 20\text{ cm}$

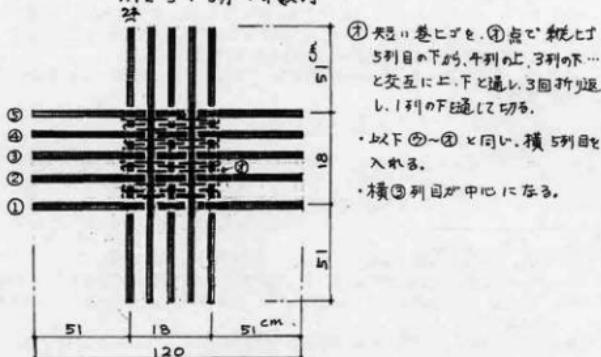
今回の作品では
 $l = 18 + 2 \times 30 + 2 \times 20$
 $= 118 \rightarrow 120\text{ cm}$



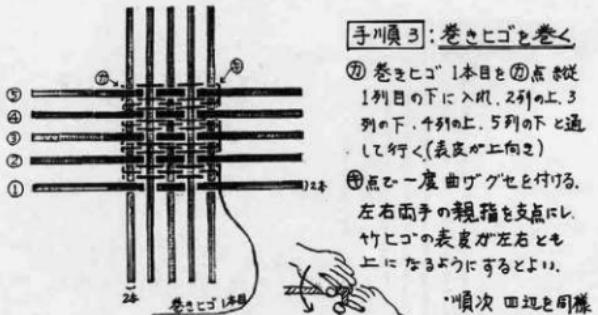
例 2 3 4 5列 → 奇数列



例 2 3 4 5列 → 奇数列

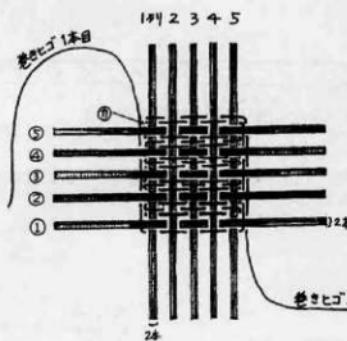


例 2 3 4 5



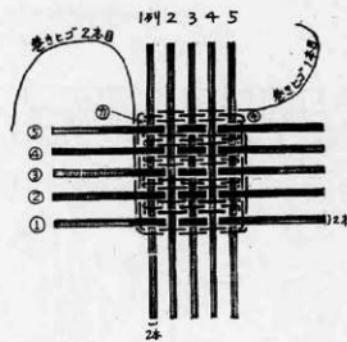
・巻きヒゴは、できるだけ 縦ヒゴに
密接するよう巻くことよい。

- ・順次 四辺を同様
に巻いて行き ⑦点で
止める。
- ・巻く辺と自分の体を
対面させるとよい。



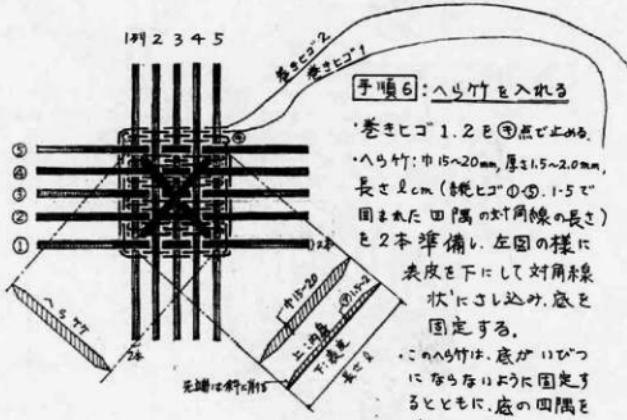
手順4：巻きヒゴ2本目を巻く

- ・巻きヒゴ2本目を⑦点縦1列目の上に掛け、2列の下、3列の上、4列の下、5列の上と通していく。巻きヒゴ1本目と2本目で縦ヒゴをはさんで行くことになる。
- ・順次回遊を巻いて行き⑦点で止める。



手順5：巻きヒゴを残り一巡

- ・巻きヒゴ2が⑦点まで来たら、1本目をあと一巡⑨点まじ巻く。
- ・巻きヒゴ2も同様に⑦点まで巻く。

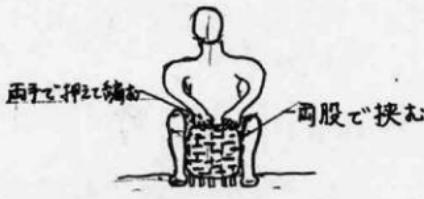


立ち上げ(タチアギ)

腰立ち→胸編み

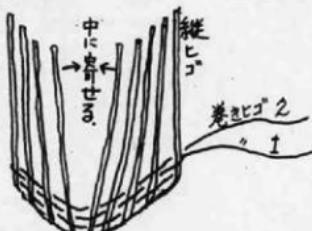
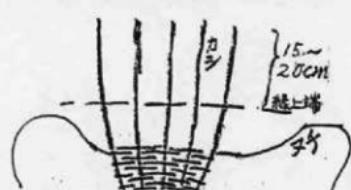
手順7:腰立ち(底から5cm位まで立ち上げること):我慢のしどころ。忍耐忍耐

- ・底編みが終わったら、表皮が下になるようにひっくり返し、一辺を床に押さえつけて曲げ癖をつける。順次回転させて残り三辺も同様に曲げる。
- ・両足を投げ出すように座り、一辺を床、両側の二辺を両足で挟み、編む辺を上にして縦ヒゴを二本の巻きヒゴで挟む要領で編んでいく。
- ・四隅の縦ヒゴは外側に開いているので内側に引き寄せ、その都度縦ヒゴ全体が平行に立ち上がるよう調整していく。一度では出来ないので巻きながら直していく。



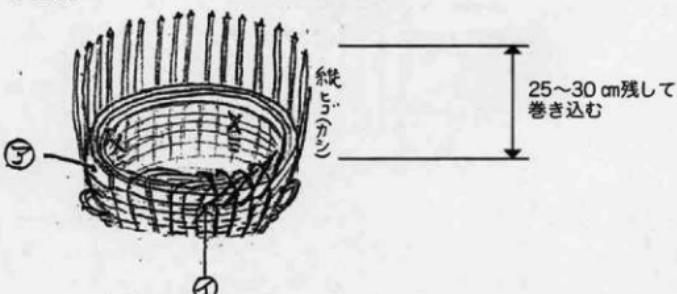
手順8:胸編み(腰立ちから縫までの立ち上げのこと):楽しい楽しい

- ・巻きヒゴの継ぎ足しの仕方:巻きヒゴが足りなくなってきたら新たな巻きヒゴを上から継ぎ重ねる。重ね長さは縦ヒゴ3~4本位の間隔がよい。内側からも外側からも継ぎ目が見えないように縦ヒゴで隠れる位置で継ぐ。
- ・縦ヒゴの先端から上から15~20cm残して止める。二本の巻きヒゴは同じ箇所で止めず、反対側でとめる。



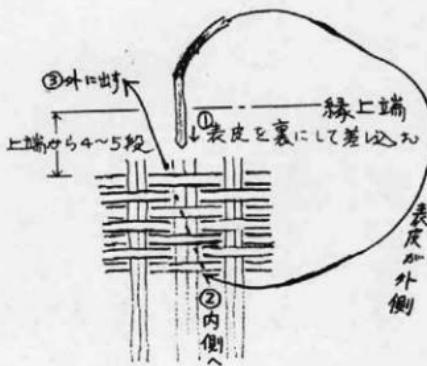
手順9:籠仕上げ(マクイ)

- ・縦ヒゴを15~20cm残し、先端を剪定ハサミで山切りにする。
- ・⑦ 2cm、厚さ約2mm、長さ: 篠円周+約15cm の竹を二本準備し、内側に入れ10cm位すらす。両端の重なる部分は少し薄くしておく。
- ・① 縦ヒゴを4~5本束ねてその先端を右側の縦ヒゴで⑦の輪と一緒に巻き込む。巻き込んだ縦ヒゴは後で抜き、その空いた穴に縦ヒゴの先端を差し込む。
- ・図参照



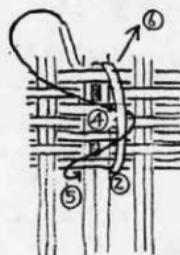
耳付竹(ミミチケ)

- ・幅7~9mm、厚さ約0.2mm、長さ約180cmの竹ヒゴを4本準備する。
- ・巻きヒゴの上端から4~5段目の所に、表皮を裏にして差し込み編んでいく。
- ・編み方は図参照



*表皮は常に外側で、途中でねじられて反転してないこと。

- ① 表皮を裏にして差し込む。
- ② 5~7段下へ差し込み、裏を通り①の左横から出す。
- ③ 外に出す。



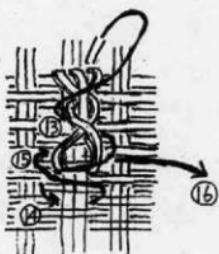
- ④ 内側から通し、ひねって上を通し、②点の反対側⑤へ
- ⑤ 内側へ差し込む⑥から外へ裏側で、たすき掛け状にならしている。
- ⑥ 外に出す。



- ⑦ 内側から通し、ひねって上を通し②点と同じ所へ差し込む
- ⑧ 中へ通し斜め上へ
- ⑨ ③と同じ所へ出す。



⑩～⑫：③～⑥と同じ

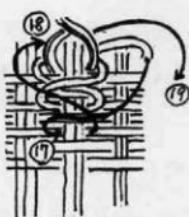


⑬ 上から通し、ひねって下へ通す。

⑭ 卷きヒゴ 3段下を 縦ヒゴの
下を通し右側へ出す

⑮ 少しひねって 内側へ

⑯ 外へ



⑰ 二段下へ差し込む

⑱ ⑲ 少しひねって 内側へ



②〇 二段下へ

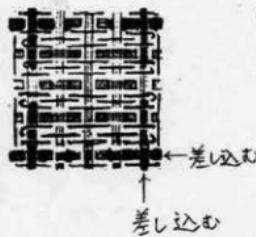
②一 内側へ



②二 二段下へ差し込む

底の補強 その1

・四隅の底を図のように補強する。



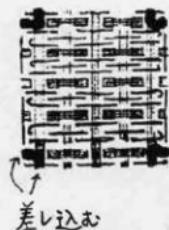
幅: 13mm 厚さ: 1mm 長さ: 15cm



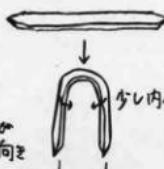
8本



底の補強 その2



幅: 13mm 厚さ: 1mm 長さ: 15cm

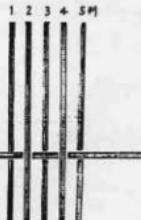


4本

・以上でティールの完成である。
・使用するときに、適当な紐を耳に通して使う。柔道着の帯が最適である。

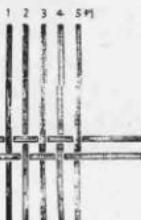


底の編み方: 筏編み変形

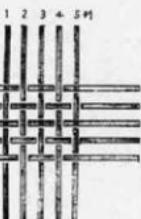


手順 1: 縦ヒゴを二本1組で1列とし、両足で押さえながら5列並べる。

・横ヒゴ ① を縦1列目の上、2列目の下、3列目の上、4列目の下、5列目の上の順で差し込んでいく。



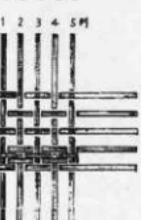
手順 2: 横ヒゴ ② を縦1列目の下、2列目の上、3列目の下、4列目の上、5列目の下に差し込む。



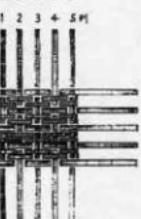
手順 3: 横ヒゴ ③ は、横ヒゴ ① と同じ。
横ヒゴ ④ は横ヒゴ ② と同じ。
横ヒゴ ⑤ は横ヒゴ ① と同じ。

・縦ヒゴ・横ヒゴの長さ、間隔を調整する。
縦ヒゴ3列と横ヒゴ ③ が中央に来るようになる。

※ここで底編みを終えて、巻きヒゴを入れて巻き始め、後は筏編みと同じよう要領でやっても良い。
この場合、隙間の差しヒゴは、ティールが完成し
その後に手順4、5の順に行けばよい。



手順 4: 横ヒゴ ① と ② の隙間に隙間埋め用のヒゴ1本目をマイナスのねじ回してリードして挿入していく。2本目のヒゴで縦ヒゴを挟むように挿入していく。



手順 5: 横ヒゴ ④ と ⑤ の間の隙間を埋めると底は終了。

・巻きヒゴのはの編み方は、筏編みと同じ。

上地のバーキづくり

沖縄市文化財調査報告書第36集

一與志平朝蒲氏製作バーキ調査報告書

2008(平成20)年12月19日発行

発 行 沖縄市教育委員会
圖 集 沖縄市立郷土博物館
〒904-0031 沖縄県沖縄市上地2-19-6
TEL (098)932-5882

印 刷 コザ印刷所
沖縄県沖縄市東1-4-18
TEL (098)937-5015

